366.6
cL56r
K

[redacted]

レーニン著

関東地方労働組合協議會譯

★

永美書房刊

[redacted]

0037969000

0037969-000

366.6-cL56r-K

労働組合論

関東地方労働組合協議会・訳

永美書房

1946　2版

AGF

366.6
cL56ル
K

[redacted]

レーニン著

關東地方勞働組合協議會譯

★

永美書房刊

[redacted]

レーニン著

關東地方勞働組合協議會譯

勞働組合論

永美書房刊

この版画は水橋総評議長の依頼主席 後藤常雄氏の提供とあるものである。(1957年12月)

366.6
CL56r
K

国立国会図書館

国立国会
33.2.-4
図書館

447638

序言

勞働組合運動に關するレーニンの見解を學ぶに當つては、吾々は就中レーニンがしばしば繰り返した「眞理は具體的である」といふ考へに留意しなければならない。勿論勞働組合運動についてのレーニンの根本的思想は、全時代に、萬國に妥當する。だが同時に看過してはならないことは、個々の觀察や或る種また他の種の議論は、レーニンの場合しば〳〵二度と繰り返さない具體的狀勢によつて規定されたことである。レーニンは決して、マルクス學のあらゆる機械化、公式化に對する鬪爭をたたかふことを止めなかつた。レーニン學自體の同じやうな公式化の危險も存在し、繰り返えし示された。この集錄本を手にする人々はそれ故、レーニンの定式を單純に暗誦し、その理由づけを機械的に學んではいけない。彼は、勞働者階級の天才的指導者が生活し活動したところの具體的歷史的狀勢を顧慮して、これやかれやを考へ拔かなければならない。レーニンの學說、特に勞働組合について述べてゐるものは、渾一である。個々の命題やテーゼは、彼の綜合概念と關連してのみ理解され得る。それ故、レーニンの勞働組合運動に關する見解をほんとうに知らうとするならば、個々の命題を手當り次第に取り出してはならない、吾々はむしろ全理論の立場から考へ拔かなければならない。

勞働組合の役割に關するレーニンの見解は、一方勞働組合に關するマルクスの學說によつて規定され、他方帝國主義時代についての彼自身の解剖により、社會主義革命、プロレタリア革命、プロレタリアート獨裁の勝利の前と後における黨の役割に關する彼の學說によつて規定される。大摑みにいつて、この見解は次のやうである。

一、勞働組合は、勞働者大衆が資本家に對する日常鬪爭の實踐においてその階級意識を育て上げて行く小學校である。勞働組合は、プロレタリアートをブルジョアジーに階級として對立せしめるところの、資本主義時代における歷史的に生れたプロレタリアートの初步的階級組織である。

二、勞働組合は、黨よりはより低度な階級結合の組織である。けれどもその役割はたいへんである。何故といふのに、それはプロレタリアートの黨と階級の最も廣汎な大衆とを結びつける傳導帶であるからである。

三、勞働組合運動における二つの偏向に對し、容赦なき鬪爭をなすことが必要である。

第一の偏向は結局するところ、勞働者運動における自然生長性の要素を過重評價し、經濟的鬪爭と政治的鬪爭とを相互に分離し、プロレタリアートの最高組織形態としての黨の指導的役割を否定し、「階級鬪爭は政治鬪爭である」といふマルクス主義の初步的眞理を忘れるものである。

勞働者運動におけるこの偏向の代表者は、主として改良主義者である。種々な國々によつて彼等は種々と議論してはゐるが、彼等の結論は同一である。ロシアにおいて一九〇五年革命前の時代の改良主義の一變種の代表者は「經濟主義者」であつた。即ち、彼等は勞働者階級の任務を經濟的改良の鬪爭に還元し、黨の戰略戰術を勞働者大衆の自然發生的氣分に適合せしめるやう提案したのである。一九〇五年の革命に續いた時代においては、この改良主義は謂はゞ國際化し、メンセヴイーキの形態において勞働組合の中立を說き、即ちプロレタリアートの黨の指導的役割を否定して、勞働組合獨自の政治を要求したのであつた。

この集錄本の最初の部分は實に、主としてこの偏向に對する鬪爭にあてられたのである。レーニン特有の深刻さと明確さとを以て、彼はこの改良主義的偏向を發見してゐるのである。

正さにこの偏向が革命前の時代におけるロシアならびに全世界勞働者運動においては最も危險であつたからして、レーニンは彼の主力をこの偏向に對する鬪爭に集中し、勞働組合の巨大な役割、その內部で活動することの必要——これを人々は自明のことに思つてゐる——を指示することは少なかつた。この理由からして吾々はここに、政治一般ではなくして、唯だ革命的政治を排擊し、それを勞働組合主義的經濟鬪爭を以て代えたところの、經濟主義者を曝露した論文を見るのである。だから吾々はここに、如何にレーニンが素的な鋭さを以て一方自然生長性の、他方目的意識性の問題を提出し、

且つ勞働組合主義のみを以てしては社會主義的意識を生み出し得ないことを强調してゐるかを、見るのである。それ故レーニンはここで全く特別に、階級としてのプロレタリアートの結合の最高形態としての黨の役割を强調してゐるのである。

レーニンの著「何を爲すべきか?」からの拔萃を讀むに當つては、自然生長性と目的意識性とについてのレーニンの記述は特定の狀勢の下で書かれたのであること、從つてマスロフがしたやうに、——彼は、勞働組合運動の領域において極左翼的氣分と偏向とが强大となつて擡頭して來てゐるときに、その「レーニンの左翼小兒病傍註」において、それが勞働者運動における自然生長性の表現であるといつて、勞働組合の意義を貶すより他の能を知らなかつた、——彼の觀察を機械的に現在の關係に移してはならないことを、吾々は確言しなければならない。

第二の偏向は、勞働者運動における勞働組合の役割の過少評價である。この偏向は强大な、視野狹少な、我利的、利己的、小ブルジョア的な、帝國主義的な氣持を有し、帝國主義により買收され腐敗せしめられた勞働貴族層(レーニン)の形成によつて、つくり出されたのであつた。この偏向は、帝國主義戰爭とその後における勞働組合指導者の比類なき裏切的政治の一反動であつた。

レーニンは勿論、資本主義から社會主義への過渡期における勞働組合の反動的傾向を主張した。けれども彼は熱情的に勞働組合からの脫退のあらゆる主張者に反抗し、そしていつた、かゝる政策はヒ

ステリーであり、小ブルジョア的革命家の特徵であつてプロレタリアート前衛の特徵ではない。共產黨が若し勞働組合を占領することの困難を恐れて最小抵抗線の道をとるならば、——卽ち、「全くほやほやな、淸淨潔白な、純粹無垢な(そして多くの場合、恐らく甚だ年若な)共產主義者によつて考案された勞働者同盟等々」の創說の道をとるならば、共產黨は勞働者階級の前衛としてのその役割に値しないであらう、と。

何故レーニンはかくも辛辣に、勞働組合からの脫退の主張者に反對したのであるか? 國際勞働者運動の經驗は彼に告げるに、勞働組合は歷史的に發生したプロレタリアートの大衆組織であること、舊くからの組織に對抗して——新らしい、人爲的なものを形成しやうといふあらゆる企ては失敗に終り、大衆からの共產主義者の孤立化を招かざるを得ないことを以てしたからである。レーニンは、その日常の苦しみに對するプロレタリアートの鬪爭への積極的參加によつてのみ、その階級意識に目醒めた部分が既に勞働組合的に組織されてゐるところのプロレタリアートの大多數を獲得することを、知つてゐたからである。勞働組合を通じて大衆へ——これがレーニンの勞働組合運動の領域における主要テーゼである。

レーニンが「小兒病」を書いてから、六年以上經過した。この六年間にわたる革命的活動の成功のうちにも、不成功のうちにもレーニンの遺言は完全に證明された。このことについて確信を抱くため

には、唯だ、一九二四年二五年極左翼指導下のドイツの黨の勞働組合活動の悼ましい經驗を、イギリス共産黨の勞働組合活動の積極的成果に對立させて見ればいい。そして最近、共産黨が勞働者大衆獲得に成功を收めることが出來たとするならば、その主たる根據の一つは、直接間接勞働組合からの脫退を說くあらゆる理論に對するコミンテルンの辛棒强い鬪爭であつたのである。

最後にレーニンが勞働組合からの脫退の主張者にかくも精力的に反對したのは、革命前夜ならびに「社會革命後の日に」おける勞働組合の偉大なる意義を認めたからであつた。十月前夜と十月直後數ケ月間における諸經驗は、最早この問題について何等の動搖をも許さない。

勞働組合論

目次

序言……一
第一篇　資本主義時代における勞働組合……一
第一章　社會主義と勞働者運動……一
一　勞働者運動における自然生長的要素……一
二　勞働者運動における意識的要素……一
三　眞實の階級意識……八
四　階級闘爭は政治闘爭である……一〇
五　勞働組合主義的政治はブルジョア政治である……一五
六　ストライキ運動における經濟と政治との關聯……二六
第二章　黨と勞働組合……三三
一　社會主義黨と無黨革命主義……三三

二　黨と組合との關係に關するボルセヴィーキの最初の決議……四三
三　中立の根據について……四四
四　「中立主義」に對する闘爭――革命的マルクス主義者の初歩的任務……五三
五　革命家は反動的勞働組合の内部において活動すべきであるか……五四
六　勞働組合における共産主義者の任務……六七
第二篇　十月前夜における勞働組合問題……七三
第一章　ロシア農業勞働者組合創設の必要について……七三
第二章　勞働者の管理について……七六
附　錄　註……八一

第一篇　資本主義時代における勞働組合

第一章　社會主義と勞働者運動

「何をなすべきか」より

一　勞働者運動における自然生長的要素

勞働者運動における自然生長的要素は、本質上、意識性の萠芽的形態に他ならない。原始的暴動も亦、既にある程度まで意識の覺醒したことを物語るものである。即はち、勞働者は自分の上に覆ひかぶさつてゐる制度の不動性に對する傳來の信仰を失ひ、……勞働者は一個の集合的防禦の必要をまだ理解するまでにはなつてゐないにしても、感じはじめたのであり、かくて彼等は官憲に對する奴隷的服從と決定的に絶緣したのである。だがそれは尙ほ多分に、闘爭といふよりは、絶望と復讐との表現であつた。

九〇年代（註一）のストライキにおいて、吾々は既に意識性がもつと強く閃いてゐるのを見る。即

ち、一定の要求が掲げられ、如何なる時期が最も有利であるかが前以て算定され、他の個所における場合や先例が評定される、等々これである。若し暴動が被抑壓民衆の單なる反抗であるならば、組織的ストライキは既に階級闘爭の萠芽たることを現はしてゐる。だが、それは飽くまでも端初的な萠芽である。それ自體では、これ等の闘爭は勞働組合主義（トレードユニオニズム）的闘爭であつて、なほ斷じて社會民主主義的闘爭ではなかつた。即ち、それは勞働者と資本家との敵對關係に對する覺醒を示すものではあるが、しかし勞働者は現在の政治的社會的全制度に對しての彼等の利益の不和解的對立の意識を有つてゐなかつたし、亦有つことも出來なかつたのである。これを要するに、勞働者はまだ斷じて社會民主主義的意識を有たなかつたのである。かゝる意味において九〇年代のストライキは、「暴動」に比すれば、偉大なる進歩であつたにも拘らず、尙純粹に一個の自然發生的運動であつた。

二　勞働者運動における意識的要素

……勞働者運動における自然生長性に對するあらゆる崇拜と「意識的要素」の役割、即ち社會民主主義の役割に對するあらゆる蔑視とは、同時に、――この役割を蔑視する者が、欲すると否とに全く拘りなく――勞働者に對するブルジョア的イデオロギーの強化を意味する。「イデオロギーの過重評價」乃至は意識的要素の役割の誇張、等々を喋々する者は、勞働者が「彼等の運命を指導者の手中から

奪取」することが出來さえすれば、純粹の勞働者運動はそれ自體のうちから、一個獨自のイデイオロギーを形成することが出來るし、また形成するであらう、と考へてゐるのである。しかしこれこそ大きな誤りである。上來述べ來つたところを補足するために、オーストリア社會民主黨の新綱領草案（一九〇一年）の場合に述べたところの、カール・カウツキー（註二）の極めて適切にして重要なる言葉を、吾々はここに引用しやう。

「多くの吾が修正派批評家は、經濟的發展並びに階級闘爭が社會主義的生産の前提條件のみならずその必然に對する意識をも亦直接つくり出す、とマルクスが主張したかの如く考へてゐる。そしてこれ等の批評家達は、あらゆる近代的諸國のうち最高の資本主義的發達の國たるイギリスが、この認識を最も缺いてゐるといふ駁論を以て濟まし込んでゐる。

新らしい草案によると、オーストリア綱領起草委員會も亦、右の通りに反駁されたところの自稱「正統派マルクス主義」の立場に同ずるものと見られる。けだし、曰く「資本主義の發展がプロレタリアートを增大すればするほど、プロレタリアートは資本主義に對する闘爭を開始することを餘儀なくされ、益々その資格を獲て來る。彼等は、社會主義の可能性と必然性とに對する意識にまで發展する等々。」

この關係においては、社會主義的意識はプロレタリアートの階級闘爭の必然的、直接的成果といふ

ことになつてゐる。これはしかし誤りである。學理としての社會主義はたしかにプロレタリアートの階級鬪爭とひとしく今日の經濟的諸關係のうちに根元を有し、後者とひとしく資本主義の生んだ大衆の貧困と窮迫とから發現する。けれども兩者は、相互的にではなく、平行的に、しかも相異なる前提から生れるものである。近代的社會主義意識は、深い科學的洞察の基礎においてのみ、發生し得る。事實、今日の經濟科學は、今日の技術と同樣に、社會主義的生産の一個の前提條件を形成するものである。だがプロレタリアートは如何に熱望しやうとも、そのいづれをも創造することは出來ないのだ。兩者は共に今日の社會過程から發生するものである。しかも、科學の擔當者はプロレタリアートではなくて、ブルジョア智識階級（傍點はカウツキー）である。實にこれ等の階級層に屬する成員のあるもののうちに、近代的社會主義も亦生れ、彼等を通じて智識的にすぐれたるプロレタリアートにはじめて傳えられ、さらにこれ等の人々が、事情の許す限り、プロレタリアートの階級鬪爭の中へ持ち込んだものである。それ故社會主義的意識は、プロレタリアートの階級鬪爭の中へ、外部から持ち込まれた何物かであつて、鬪爭から自然的に生れた何物かではない。

右に應じて、舊ハインフェルド綱領も亦、全く正當に述べて曰く、社會民主黨の任務はプロレタリアートに彼等の地位と彼等の使命とに對する意識を注入するにある、と。もしかゝる意識が階級鬪爭からひとりでに發生するものならば、かういふ必要はない筈である。新草案は、これ等の章句を舊綱

領からゆづり受け、これを以上に述べた個所に、つぎ合はせてゐる。かくして、思想的聯關は、完全に寸斷されるに到つたのだ。……」（「ノイエ・ツアイト」第二〇卷第一號）

勞働者大衆自身によつてその運動の過程において完成される獨自のイデイオロギーが全然有り得ない(*)とするならば問題は次の一點に歸する。曰く、ブルジョアイデイオロギーか、然らずんば社會主義イデイオロギーか、と。ここには中間の道はない。（何故といふに、人類は「第三」のイデイオロギーは斷じて作り出さなかつたからである。然り、階級對立によつて分裂してゐる社會においては、一般に階級の外に立ち、又はそれを超越したイデイオロギーは存在し得ないのである。）ゆえに、社會主義的イデイオロギーに對するあらゆる蔑視、これからのあらゆる絶緣は、同時にブルジョアイデイオロギーの强化を意味する。人は自然生長性を主張する。だが、勞働者運動の自然成長的發展は、正さにブルジョアイデイオロギーの膝下に從屬することとなり、正さに「クレド」（註四）の綱領に準據することになるのだ。けだし自然生長的勞働者運動は、勞働組合主義であり、勞働組合一本主義であり、しかも勞働組合主義（註五）は、正さにブルジョアジーが勞働者を思想的に奴隷化したことを意味するからである。ここに吾々の任務、卽ち社會民主主義者の任務が、自然生長性に對する鬪爭にある所以であり、さらにまた、ブルジョアジーの翼の下に赴かんとする勞働組合主義の自然成長的傾向から勞働者運動を引き離なし、かくて運動を革命的社會民主主義のために獲得することにある所以

である。

*このことは勿論、勞働者がかゝるイデイオロギーの形成に毫も參加しないといふのではない。たゞ、彼等は勞働者としての資格においてではなく、プルードンやワイトリングの如く、社會主義の理論家としてこれに參加する。換言すれば、彼等は大なり小なり當世紀の智識を習得し、さらにこの智識を發展せしめることに成功した場合にのみ、またその範圍内でのみ參加するのである。そこで、勞働者がしば〳〵このことに成功するためには、一般に勞働者の意識水準を高めることに全力をつくさねばならぬ。そして、勞働者は「勞働者用の文獻」の如き人爲的に狹められた框の中に閉ぢこもつてゐないで、常に益々一般的文獻をものにすることを學ぶ必要があるのだ。むしろ正確には、彼等は「閉ぢこもつてゐる」といふよりも、「閉ぢこめられてゐる」といつた方が當つてゐるであらう。何故といふに、勞働者は智識階級のためにも書かれたすべてのものを讀んで居り、且つ讀まんと欲してゐるからである。ただ若干の（たちのよくない）智識階級のみが、工場制度を説明したり、或ひはとつくに知れわたつてゐることを反覆繰り返えすことを以て「勞働者」には充分であると信じてゐるに過ぎないのだ。

ドイツの例を取つて見よう。ドイツ勞働者運動におけるラサール（註六）の歴史的功績は、何處に求めらるべきであるか？　それはドイツ勞働者運動をそれが（シュルツエ・デーリツツ（註七）その

他の影響の下に）自然發生的にとるに到つた進歩黨的勞働組合主義と協同組合主義の軌道から轉換せしめた處に存する。この任務を果さんがためには、自然成長的要素の過少評價、過程としての戰術、要素と境遇との交互作用等々を喋々するよりもあるものが必要であつた。そうするためには自然成長性に對する絶望的な鬪爭が必要であつたのであり、この永年に亘る鬪爭の結果はじめて、譬へばベルリンの勞働者人口を進歩黨（註八）の支柱から社會民主黨の最もよき牙城へと導くことが出來たのであつた。そしてこの鬪爭は今日尙ほ終結してはゐない。……今日尙ほドイツ勞働者階級は謂はば幾多のイデイオロギーに分裂してゐる。即ち、勞働者の一部はカソリック教的および君主主義的勞働組合に組織せられ、他の部分は――イギリス流の勞働組合主義を信奉するブルジョアによつて創立せられたヒルシュ・ヅンカーの中に、第三の部分は社會民主黨の組合（註九）に組織されてゐる。この最後の組合は、兩餘の如何なるものよりもはるかに多數を包容してゐる。だが、この優越を社會民主黨イデイオロギーが捷ち得たのは、ひたすら他のあらゆるイデイオロギーに對する執拗な鬪爭の結果であり、またそれによつてのみこの優越を維持し得てゐるのである。

だが、何故――と讀者は尋ねるであらう――自然生長的運動、即はち最少抵抗線を辿る運動は、結局、ブルジョアイデイオロギーの支配といふ結果になるのであるか？　それはブルジョアイデイオロギーはその歴史からいえば社會主義的イデイオロギーよりは餘程古く、その思想は遙に萬遍なく出來

上つて居り、さらに比較にならぬほど多くの宣傳手段を有つてゐる、といふ簡單な理由からである。そして、社會主義運動が尙ほ新らしければ新らしい程、非社會主義的イデイオロギーを固めやうとするすべての企てに對して、一層精力的に鬪爭しなければならないし、さらにまた「意識的要素の過重評價」に反對してわめき立ててゐるよからぬ忠告者達に對して、斷乎として勞働者を警戒しなければならない。

三　眞實の階級意識

……若しも勞働者が恣意と抑壓と暴力と權力濫用との加へられるあらゆる場合に、いかなる階級がかゝる運命に遭遇しやうとも、いきなり奮ひ起ち、しかも、彼等が別の立場からではなく社會民主主義の立場から、奮ひ起つことに馴らされてゐないならば、勞働者階級の意識は眞實の政治的意識ではあり得ないのである。若しも勞働者が、具體的な而かも必ずや生き生きとした政治的事實や事件を手にとつて、それぞれの他の諸階級をその智識的道德的生活のあらゆる現はれにおいて觀察することを學びとることが出來ず、また彼等が、人民のあらゆる階級、層、群の全活動および全生活の上に唯物論的分析と唯物論的判斷方法とを實際に適用することを學びとらない限り、勞働者大衆の意識は眞實の階級意識たり得ないのである。勞働者階級の注意と目標とを專ら、或は單に主としてでも、勞働者

階級自身の身の上にのみ向ける者は、決して社會民主主義者ではない。何故といふに、勞働者階級の自己認識は、現代社會のあらゆる階級の相互關係についての、理論的表象が完全に明瞭であるか否かとばかりでなく——といふよりむしろより多く政治生活の上で練り上げられた表象が完全に明瞭であるか否かと、離れ難く結びつけられてゐるからである。それ故に實際、經濟鬪爭が、大衆を政治運動に動員する最も廣汎に適用し得る手段であるといふ經濟主義者（註一〇）の說敎が甚だしく有害であり、その實際的意義からいえば、甚だしく反動的であることとなるのだ。社會民主主義者たらんがためには、勞働者は地主と僧侶、高官と農民、學生と浮浪人などの經濟的本質と社會政治的姿容とに對して明確なる意見を有ち、さらに彼等の長所と短所とを知り、またすべての階級とすべての層とがその利己的傾向やそのほんとうの「內心」を紛飾するために用ふるところの常套語や、あらゆる種類の詭辯を識別しなければならない。また勞働者は、いかなる機關といかなる法律とがこれやかれやの利益を表現してゐるものであるか、またいかに表現してゐるものであるかを、知らねばならない。しかし、かゝる「明瞭な表象」はどういふ書物からも汲みとられるものではない。それは卽ち、與えられた瞬間に吾々の周圍に生起するところの出來事や、お互ひに話されさゝやかれるところの出來事や、乃至は或る事件となり或る數字となり或る判決となりその他等々となつて出現するところの出來事の生き生きとした描寫と敏速な曝露とによつてのみ獲得し得るのだ。これ等の全面的な政治的曝露は、

大衆を革命的運動に教育するための基本的條件である……。

四　階級闘爭は政治闘爭である

ロシア勞働者の經濟闘爭の擴大と强化とは、曝露經濟的（工場や職業についての）「文獻」の發生と兩々相俟つて進行したといふことを、誰れも知つてゐる。「ビラ」の主要なる内容は、工場制度の曝露であり、そして忽ちにして曝露に對する眞劍な熱情が勞働者の間に燃え上つた。社會民主主義者のサークルが、勞働者の悲慘な生活や、無際限の酷使や、一切の權利を剝奪されてゐる境涯などについてあらゆる眞實が語られてゐる新らしい種類のビラを提供しやうとしてゐるのを、そして提供し得るのを確信するに到るや否や、勞働者は工場や製作所から通信を、謂はゞ雨の如くに、送り始めた。この「曝露文獻」はこつぴどくやつつけられてゐる工場にばかりでなく、一般に曝露された事實のいくらかでも經驗してゐるあらゆる工場に、怖ろしい感動を與えたのである。しかも、各種の工場や職業に從事する勞働者の窮乏と悲慘とは多くは共通なものであるから、「勞働者生活の眞相」を皆んなが熱狂して迎へたのである。「印刷される」といふことは、最も意識の後れた勞働者の間にも、眞實の熱情を喚び起こした——それは掠奪と壓迫との上にたてられた今日の全社會制度に對する戰ひの萠芽的形態としての貴い情熱である。そして右の「ビラ」は、多くの場合實際は一個の宣戰布告書にひとしかつ

た。けだし、曝露はおそろしく煽動的效果を及ぼし、勞働者の間においては癖にさわつて仕方のない不條理を撤廢せよといふ一般的要求に轉化し、しかもこの要求をストライキにまで發展せしめんとする準備をも呼び起こすにいたつたのである。そして工場主達自身も結局これ等のビラの意義を、宣戰の布告として認めねばならなくなつた。それは、しば〳〵彼等工場主の側で、宣戰そのものを安閑として待つて居られなくなつたほどである。曝露の場合いつもそうであるやうに、それはその存在だけで既に仕事をなし、それが公表されたといふ事實だけで强い精神的壓力たるの意義を捷ち得た。一枚のビラが現はれただけで、要求の全部或ひはその一部が貫徹した例は、珍らしくなかつた。一言にして盡せば、經濟的（諸々の工場をやつつけた）曝露は、經濟闘爭の重要な槓杆であつたのであり、現にやはりそうである。そして、勞働者をして必ずや自助の手段をとるに到らしめるところの資本主義の存在する限り、この意義は變らないであらう。先進ヨーロッパ諸國においては、場末の「工場」や神様すらお忘れになつたやうな「家内工業」の部門などにおける不正の曝露が、階級意識覺醒の出發點、勞働組合闘爭の開始と社會主義の普及との出發點となつてゐるのを、今尙ほ見受けるのである。

ロシア社會民主主義者の大多數は、最近ほとんど皆んな、工場曝露のかゝる組織運動に沒頭して了つた。いかに彼等がこの仕事に深入りしすぎたか、そしてその結果それ自體としては是はまだ社會民主主義的行動ではなく、單に勞働組合主義的行動に過ぎないことを彼等が忘れるに到つたかを知るた

めには、「ラボーチヤヤ・ムイスリ」(註一一)を見れば明らかである。諸々の曝露が捉えたのは實際においては、專ら或る一定の職業の勞働者とその雇主との關係のみにとどまり、そしてその「商品」を少しでも有利に賣りつけ、純粹に商業取引の地盤の上で買手と爭ふことを勞働力の賣手に敎へ得ただけである。これらの曝露は、社會民主主義運動の出發點となり、一構成要素とはなり得た(但し、前衛の組織がそれを適宜に利用することによつて)が、同時にまた(自然生長性の前に屈服するならば、當然のことなのだが)「勞働組合一本主義」的鬪爭と非社會民主主義的勞働者運動へと導くことも出來た。

社會民主主義者(註一二)の指導するのは、ただに勞働力の販賣に有利な條件を獲得するための勞働階級の鬪爭ばかりではなく、また、無產者が富者に身を賣らねばならぬやうに出來てゐる社會制度の撤廢のための鬪爭もさうなのである。社會民主主義者は、單に或る一定の企業者團との關係において勞働者階級を代表するのみならず、近代社會のあらゆる階級との關係において、組織された政治的權力としての國家との關係においても勞働者階級を代表するものである。それゆえ、社會民主主義者は經濟鬪爭にのみ自らを局限することが出來ないばかりでなく、經濟的曝露戰の組織が彼等の主たる仕事となることも許されないことは、明らかである。吾々は、積極的に勞働者階級の政治敎育と彼等の政治意識の發展とに進まねばならない。……

ところで、問題は政治敎育とは何ぞやである。勞働者階級は、專制主義の敵であるといふ思想のプロパガンダにのみ止まるべきであるか? 勿論、否である。勞働者に對する政治的壓迫を說明するだけでは不充分である。(それはあたかも、勞働者の利害と雇主の利害の對立を彼等に說明するだけでは、不充分であるやうに)。かゝる壓迫が具體的に現はれるたびごとに、煽動しなければならぬ。(あたかも、今日吾々は經濟的壓迫の具體的發現ごとに、煽動を始めてゐるやうに。)そして、この壓迫の下にあらゆる種類の社會階級は呻吟しなければならないのであるがゆえに、あらゆる種類の生活と行動との領域に、卽ち職業的、一般市民的、個人的、家族的、宗敎的、科學的、諸生活と行動との領域に、それが發現するがゆえに、——若しも吾々が專制主義の全面的政治的曝露の組織に着手しない限り、勞働者の政治意識を發達さすべき吾々の任務は充たされないことは、けだし明白なことではないか? (經濟的煽動を行ふためには、工場内の不正をあばかねばならぬやうに。)

これは、實にわかり切つたことのやうに思へる。ところが丁度この場合實際は、政治意識を全面的に發展させることの必要は、單に言葉の上だけで、一般に」認められてゐるに過ぎないのである。たとへば「ラボーチエ・デエーロ」(註一三)は、全面的政治的曝露を組織すべき(或は組織のきつかけたるべき)任務につくどころではなく、かへつてこの任務についた「イスクラ」(註一四)を後へ引きもどさうと企てたのである。

見よ。

「勞働者階級の政治闘爭は、單に（斷じて單にではない）「經濟闘爭の最も發達せる、最も廣汎なる、最も有效なる形態たるに過ぎない。」（「ラボーチエ・デエーロ」の綱領、「ラボーチエ・デエーロ」第一號三頁）

「現在、社會民主主義者の前に課せられてゐる任務は、出來得る限り經濟闘爭そのものに政治的性質を賦與するにある。」マルツイノフ（註一五）第一〇號四二頁）

「經濟闘爭は、大衆を積極的な政治闘爭へ誘引するための最も廣汎に適用さるべき手段である。」（同盟大會（註一六）の決議と補足案「二つの大會」（註一七）一一頁と一七頁）

讀者の見られる如く、これ等のテーゼはすべて、「ラボーチエ・デエーロ」發刊の當初より最近の「編輯局指令」に到るまでを一貫してゐるものであり、そしてそれ等は皆んな政治的煽動と政治的闘爭とに對して同一の見解を明瞭に表明してゐるものである。人々はこの見解を、政治的煽動は經濟的煽動に追從せねばならぬといふ、すべての經濟主義者の間に最も勢力のある所說の見地から、檢討して見るがいい。果して經濟闘爭は一般に、大衆を政治的闘爭へ誘導するための「最も廣汎に適用さるべき方法」であるのか？　斷じてそうではない。この「誘導」のために以上に劣らず「廣汎に適用さるべき」手段は、官憲の壓迫や專制的暴壓のありとあらゆる發現であり、經濟闘爭と結びついてゐる

現象のみでは絶對にない。なにゆえに、ゼムスキーエ・ナツアールニーク（註一八）、「農民の笞刑、官吏の收賄、都會の「平民」に對する官憲の取り扱ひ、飢えたるものに對する迫害と、人民のあらゆる智識欲の抑止、稅金の沒義道的取り立て、「異敎徒」（註一九）狩り、兵卒の調練、學生（註二〇）および自由主義的智識階級に對する軍隊式取り扱ひ」、その他數限りなき經濟「闘爭」とは直接に結びついてゐないこれ等の壓迫の發現が、なにゆえに、政治的煽動に對し、政治闘爭への大衆動員に對して、より少なく「廣汎に適用さるべき」手段であり誘因であるのか？　否、正さにその反對なのだ。勞働者が無權利、恣意および暴行（自分自身、又は自分に接近してゐるものに對する）のために苦しまなければならないところのあらゆる生活場面の總和のうちにおいて、勞働組合的闘爭に對する官憲の抑壓の占むる地位の如きは、疑ひもなくほんの小部分に過ぎないのである。然らば、社會民主主義者にとつて、一般的に云つて、「廣汎に適用さるべき」他の多くの方法があるにも拘らず、單に一つの方法のみを「最も廣汎に適用さるべきもの」などと宣言して、以て政治的煽動の飛躍を前以て制限しやうとするのは、何故であるか？……

……「同盟」は、ユダヤ人勞働者同盟（ブント）（註二一）の第四回大會の決議のこれに相應する箇所にある「最善の方法」といふ語句を、「最も廣汎に適用さるべき方法」といふ語句に代へたことを以て、意義あるものとしてゐる。以上の二つの決議のうちどちらがよいかは、なか〳〵いひ難い。吾々

の意味では、どちらもより悪いのだ。同盟も「ブント」と同じく、(傳統の影響を受けて、一部分恐らく無意識的にさへ)政治の經濟主義的、勞働組合主義的解釋へと迷ひ込んでゐる。「最善」といふ文句を借りて來やうと、「最も廣汎に適用さるべき」といふ文句を借りて來やうと、事の本質はいささかも變らないのである。若しも「同盟」が「經濟的地盤の上における政治的煽動」が最も廣汎に適用されてゐる(「適用さるべき」ではない)手段であると云つたのならば、それは吾が國社會民主主義運動發展の或る一時期に關しては、正當であつたであらう。即はち、經濟主義者達に關し、一八九八年—一九〇〇年の多くの實際家達(よしその大部分ではなくとも)に關していふのならば、正しかつたであらう。けだし、これ等の經濟主義的實際家達は實際、殆んど專ら經濟的地盤の上で政治的煽動を適用したからである(果して適用したと云ふことが出來るのなら)。かゝる政治的煽動を、すでに見た如く「ラボーチヤヤ・ムイスリ」(註二二)も「自己解放團」(註二三)も、認め且つ推賞すらしたのである。經濟的煽動にとつては有效なる事柄でも、政治的闘爭にとつては有害なる支障を伴つてゐた、と斷定すべきであつたにも拘らず、「ラボーチエ・デエーロ」(註二四)は、最も廣汎に適用されてゐる(經濟主義者によつて)手段を最も廣汎に適用さるべき手段であると宣言してゐるのである!

……社會民主主義者の任務は、「經濟闘爭そのものに政治的性質を附與する」にあるといふマルツイノフの言葉は、如何なる具體的現實的意義を有つてゐるであらうか? 經濟闘爭とは、勞働力をより

有利に販賣する諸條件を獲得するために、勞働條件と生活條件とを改善するために遂行される、雇主に對する集合的闘爭である。この闘爭は必ずや、職業的闘爭でなければならない。何故といふに、勞働條件は職業の種類によつてたいへんな相違があり、したがつて右の諸條件を改善するための闘爭は各職業毎に行はれなければならないからである。(西歐では勞働組合によつて、ロシアにおいては臨時の職工同盟や種々なビラ等によつて。)從つて「經濟闘爭そのものに政治的性質」を賦與するといふことは、「法律上または行政上の手段」によつて、右の職業上の要求、即はち勞働條件の職業的改善を實現することである。(マルツイノフが彼の論文のその直ぐ次の頁で云つてゐるやうに。)これは正さに、あらゆる職業的勞働者組合が現にやつてゐることであり、また常にやつてゐたことであつた。人は、根本的に博學な(そして「根本的に」日和見主義的な)ウェッブ夫妻(註二五)の著作を一瞥して見るがいい、そうすると次のことがわかるであらう、即はち、イギリスの勞働組合は「經濟闘爭そのものに政治的性質を賦與する」任務を既に永年認めて來、それを實現してゐるのであり、それはとつくからストライキの自由のために、協同組合的ならびに勞働組合的運動に對するありとあらゆる法律的障害の撤廢のために、婦女子保護法のために、衛生法や工場法等によつて勞働條件を改善するために、闘爭して來てゐるのである。

このやうにして、「おそろしく」慧眼にして、且つ革命的に響くこの「經濟闘爭そのものに政治的性

質を賦與する」と云ふ物々しい言葉の背後には、ほんとうは、社會民主主義的政治を勞働組合主義的政治にまで貶し去らうといふ傳統的努力がかくされてゐるにすぎないのである！「生活の革命化のかはりに、獨斷の革命化」をもつて來た「イスクラ」の一面性を訂正するといふ口實の下に、彼等は經濟的改良のための闘爭を、さも何らか新らしいものでもあるかのやうに、吾々の前に提供する。實際、經濟的改良のための闘爭を除外して見ると、「經濟闘爭そのものに政治的性質を賦與する」と云ふ言葉のなかには、全くなんにも含まれてゐないのだ。そうして、マルツイノフ自身が、彼の言葉の意義を本當に熟考したのであるならば、この簡單な結論に到達し得た筈であらう。

「吾が黨は」――と彼は「イスクラ」に對して自分の攻城砲を突き出しながら云ふ――「經濟的搾取、饑餓、失業等を防止するための法律上ならびに行政上の方策についての具體的要求を政府につきつけることが出來たし、またそうせねばならなかつた。」（「ラボーチエ・デエーロ」第一〇號第四二―四三頁）

「方策についての具體的要求」――これこそは社會改良の要求ではないか！ そこで、吾々はもう一度公平なる讀者に問はう。彼等が「イスクラ」との意見の相違點として、經濟的改良の必要についてのテーゼを掲げる場合、吾々が彼等を覆面せるベルンシュタイン主義者（註二七）と呼んだからと云つて、これがラボーチエ・デエーロ主義者（註二六）（不手際な、耳慣れない言葉を使うのを許して頂き

たい）を誹謗したことになるのであらうか？ と。

革命的社會民主主義は、常に、改良のための闘爭を彼等の活動の中に含めて來てゐる。だが、彼等が「經濟的」煽動を利用するのは、單に諸種の方策を要求するためだけだはなく、さらに（そして何よりも先づ）專制政治撤廢を要求するためなのだ。且つまた、この要求を經濟闘爭の地盤において のみならず、社會政治生活一般のあらゆる現象の地盤において、政府につきつけることを社會民主主義者は自己の任務と考ふるのである。一言にして盡せば、社會民主主義者は改良のための闘爭を全運動の一部として、自由と社會主義とのための革命的闘爭に、從屬せしめるものである。マルツィノフは段階論（註二八）を別の形で復活させて、政治闘爭には謂はゆる經濟的發展行程の先行が無條件的に必要であるとしやうとしてゐる。彼は革命の飛躍期に、改良のための闘爭といふ自稱特殊「任務」をもつて現はれ、ために黨を後退させ、「經濟主義的」日和見主義、乃至は「自由主義的日和見主義」に、手をかしてゐるのである。

さらにマルツイノフは「經濟闘爭そのものに政治的性質を賦與する」といふ業々しいテーゼの背後に、改良のための闘爭を恥づかしげにしのばせながら、彼は特別目新らしいもののやうに經濟的のみの（甚しき工場に關するもののみの）改良を主張する。何故彼がそうしたのかを、吾々は知らない。おそらく不注意のためか？ だが、若し彼が「工場内の」改良のみを問題にしてゐるのでないならば、

吾々がさきに引用したテーゼは、すつかりその意義を失ふことになる。それとも恐らく、彼が、經濟的領域だけでは政府側からの「讓歩」が可能であり、たしからしさがあると考へてゐるからなのか？果して然らば、それはとんでもない誤りである。讓歩は、體刑、旅行券、償還、異教、檢閲、等々に關する立法上の領域においても、可能であり、且つ獲得される例もあるのである。「經濟的」讓歩（乃至似而非讓歩）は、勿論、政府にとつては一番安あがりであり、また一番都合のよいことでもある。だが正さにそれゆえに、吾々社會民主主義者は、吾々には經濟的改良が好ましいのであるとか、吾々は經濟的改良を特に重要視してゐるといふが如き見解（または誤解）を、どんなことがあつても斷じて流布してはならないのである。

「かくの如き要求は！——とマルツイノフは前掲の立法的ならびに行政的方策についての具體的要求についていふ——單なる空語には決して終らないであらう。といふのは、これ等の要求は摑み得べき效果を約束するが故に、勞働者大衆によつて積極的に支持され得るものであるから。……」

吾々は經濟主義者ではない、おゝ、どうして、どうして！ ただ、吾々はこういふのだ。卽はち、專制主義に對するあらゆる抗議が何等摑み得る成果を絶對に保證しないのであれば、勞働者大衆はこの抗議を積極的に支持し得るものではない、（そして、自分が自身の俗物根生で以て、勞働者の心を推しはからうとするすべての人々が何んといはうと、嘗つて支持したこともないのである、と。

「雇主と政府とに對する經濟闘爭（「政府に對する經濟闘爭」！）は、それ自身の有する直接の革命的意義の外に、勞働者を絶えず彼等の政治的無力の問題に突き當らせるといふ意義を有つてゐる。」（マルツイノフ第四四頁）

吾々が右の引用文を抜き書きしたのは、先きに述べたことを繰り返えすためではなくて、「雇主および政府に對する勞働者の經濟闘爭」といふ新奇なすばらしい公式に對して、マルツイノフに吾々の特別の感謝を述べたいがためなのだ。何んと素的であることよ！ 何んといふたぐひなき天才を以て、經濟主義者間の諸分派におけるあらゆる部分的意見の相違の何んといふ名匠的解消を以て、經濟主義——「勞働者が共通の利益のために、彼等の地位の改善のために行ふ政治闘爭へ」と勞働者を糾合する云々や、さらには段階論や、「最も廣汎に適用さるべき」についての黨大會の決議等々に到るまで——の全本質が簡潔明瞭な文句で以て述べられてゐるではないか。「政府に對する政治闘爭」とは、とりもなほさず勞働組合主義的政治であつて、それと社會民主主義的政治との間には、うんとうんとかけ隔たりがあるのである。……

* * *

政治的階級意識は、外部からのみ、卽はち經濟闘爭の外部から、勞働者と雇主との關係の埒外から、勞働者に與へられ得るものである。その中からこの意識が汲み取られ得る唯一の領域は、あらゆ

る階級ならびに層の國家および政府に對する關係の領域、即はち全階級間の交互關係の領域なのである。それ故、吾々は勞働者に政治的智識をもたらすために何をなすべきであるかと云ふ問題に對しては、多くの場合實際家達が、――經濟主義に傾いてゐる實際家達は申すまでもなく――滿足してゐるやうな解答、即はち「勞働者の中へ行け」と云ふ解答を與へてはならないのである。勞働者に政治的智識をもたらすためには、社會民主主義者は人民のあらゆる階級の内に入り込まねばならず、彼等の軍の支隊をあらゆる方面に派遣しなければならないのである。

吾々がわざとこういふ極端な定義づけをえらび、わざと簡單且つ辛辣に云ひ表はしたのは、逆説を語りたいがためではなく、經濟主義者を彼等が許し難くも等閑に附した諸問題に、即はち彼等がどうしても理解しやうと欲しない組合主義的政治と社會民主主義的政治との區別の問題に突き當らしめんがためである。……

最近著しく普及した如きタイプの社會民主主義者の一サークルをとつて、その仕事を見るがいい。このサークルは、「勞働者との結びつき」を有ち、それで以て滿足し、そしてビラを發行し、それで以て工場の不正狀態や、資本家に組みする政府の偏頗的行爲や、官憲の彈壓等を攻擊してゐる。勞働者との集會においては、話しは通常或ひは殆んど、同じ題目を出でない。革命運動史、吾が國政府の内外政策の諸問題、ロシアならびにヨーロッパの經濟的發展、ならびに近代社會におけるこれやあれや

の階級の狀態の問題等々に關する講義や討論はおそろしく稀である。社會の他の諸階級との組織的連絡や、この結合の擴大などについては誰一人として考へない。大抵の場合、かゝるサークルの成員が、實際運動家の理想として描いてゐるものは、社會主義的、政治的指導者よりも、むしろ勞働組合の書記である。けだし、任意の、譬へばイギリスの勞働組合の書記は、常に勞働組合を援けて經濟鬪爭を行はしめ、工場内の曝露を組織し、ストライキの自由や、ストライキ見張り人設置の自由を制限する法律規則の不當を追求し、ブルジョア階級に屬してゐる仲裁裁判官の不公平を曝露する、等々。これを要するに、勞働組合の書記は誰でも、「雇主と政府とに對する經濟鬪爭」の指導者であり援助者である、だが、このことは未だ社會民主主義ではないといふこと、社會民主主義者の理想は勞働組合の書記であるべきではなくて、あらゆる恣意彈壓の發現に對して――それがどこに起らうと、また如何なる階級、如何なる層に對してなされやうとも――よく糾彈し得る、あらゆるこれ等の現象を官憲の壓迫と資本主義的搾取との一つの綜合圖の中に統一し得る、どんな些事でも利用して以て全世界に自己の社會主義的確信と自己の民主主義的要求（註二九）とを說き、萬人に對してプロレタリアート解放戰の世界史的意義を明らかにし得るところの、護民官でなくてはならぬといふことは、いくら强調しても尙ほ足りない位である。譬へば、ロバート・ナイト（最も有力なイギリス勞働組合の一つである鍋釜工組合の有名な書記であり、指導者である）とウイルヘルム・リープクネヒトとを比較して

見よ、そして、マルツイノフが「イスクラ」との間に意見の相違を藏してゐるところの對立をこの兩者にあてはめて見よ。しからば諸君は、こういふことを知るであらう。——吾々は、マルツイノフの論文をめくりながら議論を進めて行かう。——即はち、ロバート・ナイトは著しく「大衆を或る具體的行動に喚び寄せた」に反し、ウイルヘルム・リーブクネヒトは「すべての現制度、或ひはその部分的現象に對する革命的解明」により多く携つた。ロバート・ナイトは「プロレタリアートの最も手近かな要求を完成化し、その實現の手段を指示した」に反し、リーブクネヒトはこのことをも勿論行つたが、さらに同時に色々の反政府的層の積極的活動を指導することを忽にしなかつた。ロバート・ナイトは特に「經濟闘爭そのものに出來得る限り政治的性質を賦與する」ことに努め、そして「政府に對して、或る摑み得る成果を約束してゐる具體的な要求を提出する」ことを見事にやつてのけたのに反し、リーブクネヒトは、むしろ「一面的」「曝露」に携つた。ロバート・ナイトは「灰色の日常闘爭の發展」に大きな意義をもたせたが、リーブクネヒトは、「輝ける、完成せる思想の宣傳」に大きな意義をもたせた。リーブクネヒトは彼の指導する新聞を「現制度、とりわけあらゆる種類の人民層の利益と衝突する政治制度を曝露する革命的反對黨の機關紙」としたのに反し、ロバート・ナイトは「プロレタリアの闘爭との密接なる有機的結合のもとに勞働者のことのために働らき」——若しも、「密接なる有機的結合」なる意味を先に吾々がクリチエフスキーとマルツイノフを例にとつて究明したや

うな、自然成長性に屈する意味に解するならばだ——そして、「自己の行動範圍を制限した。」けだし、マルツイノフとひとしく彼は、「それによつて自己の行動を複雜化した」と無論信じたに相違ないからである。これを要するに、諸君が知らるゝ如く、マルツイノフは實際社會民主主義を勞働組合主義にまで貶して了つた。しかし、それも彼が決して社會民主主義の幸福を望まなかつたがためではなくて、單に彼がプレハーノフ（註三〇）を理解する代りにプレハーノフを深めやうと少しあせりすぎたといふ簡單な理由からである。……

五　勞働組合主義的政治はブルジョア政治である

「何をなすべきか」第三章より

……大衆運動の自然成長性へのあらゆる屈服、ならびに社會民主主義政治の勞働組合主義的政治へのあらゆる貶下は、正さに、勞働者運動をブルジョア民主主義の道具に變形するための地盤を作ると同じである。自然成長的勞働運動はそれ自體からは、單に勞働組合主義のみを作り出すものであり、（そして、不可避的に作り出した。）勞働者階級の勞働組合主義的政治は、正に、勞働者階級のブルジョア的政治なのだ。政治闘爭への勞働者階級の參加は、政治革命への參加すらもが、この政治をなほなかなかに社會民主主義的政治たらしめないのである。

六　ストライキ運動における經濟と政治との關聯

「經濟的ストライキと政治的ストライキ」より

一九〇五年以來、商工省發表のストライキ統計は、づつと經濟的ストライキと政治的ストライキとの區別を設けてゐる。この區別はストライキ運動の特殊的形態を生み出したところの現實そのものが、これを必要とせしめたのである。經濟的ストライキと政治的ストライキとの結合、これが右の特殊性の主要樣相の一つである。現在ストライキ運動の復活に際して、勞働者がロシアのストライキ運動のかゝる特殊性に全注意を向けることは、運動のために利益であり、事件に對し意識的態度をとるといふ立場からも利益である。

吾々は先づ、政府のストライキ統計から若干の基本的數字をあげて見やう。一九〇五年から一九〇七年にいたる三ケ年の期間に、ロシアにおけるストライキ運動は、世界が未だ曾つて經驗したことのないほどの高潮に達した。しかも、政府の統計は單に製造工場および製作所だけなので、鑛業、鐵道、建築業、其の他賃銀勞働者の多數の諸部門は、これに加算されてゐない。だが、その製造工場および製作所だけですら、一九〇五年には二八六萬三〇〇〇人、卽はちほとんど三〇〇萬人に近い勞働者がストライキし、さらに一九〇六年には一一〇萬八〇〇〇人が、一九〇七年には七四萬人がストライキ

した。一八九四年より一九〇八年に到るこの一五年間において——この期間はヨーロッパ諸國において初めて系統的なストライキ統計が作られ初めた時であるが——アメリカにおけるストライキ參加人員の一ケ年の最高數字は、六八萬人に過ぎなかつたのである。

それ故に、吾々が一九〇五年乃至一九〇七年の間に經驗した如き大衆的ストライキを、世界で最初に戰つたのは、ロシアの勞働者であつた。今日イギリスの勞働者は、經濟的ストライキの領域において、新らしく力强い躍進をとげてゐる。けれどもロシア勞働者の指導的役割は、彼等が西歐の勞働者よりも若干より强力であり、より組織的であり、より發展してゐるといふ點にその說明は求められるべきではなくて、むしろヨーロッパにはプロレタリアート大衆が獨立的に參加する全國的大危機がまだ勃發しなかつたといふ點に求められるべきである。かゝる危機が一旦到來するや、ヨーロッパの大衆的ストライキは一九〇五年のロシアよりも尙ほ巨大であるであらう。

さて、この時期において、經濟的ストライキと政治的ストライキとはどういふ關係にあつたか？政府の統計はこの點につき次の解答を與ふる。

	ストライキ件數（單位千）	
	（一九〇五年）	（一九〇六年）	（一九〇七年）
經濟的ストライキ	一、四三九	四五八	二〇〇

政治的ストライキ	一、四二四	六五〇	五四〇
總計	二、八六三	一、一〇八	七四〇

右の數字は二種のストライキの間における密接不可分の關係を物語つてゐるのである。即はち、運動の最高期（一九〇五年）の特徴は、鬪爭が極めて廣汎な經濟的地盤を有つてゐたことである。換言すれば政治的ストライキは同年においては、經濟的ストライキの確乎たる地盤の上に立つてゐたのだ。參加人員の數は、政治的ストライキにおけるよりも經濟的ストライキにおいて多數であつた。

一九〇六年ならびに一九〇七年における運動の沈滯に相應するものは、經濟基礎の衰退であつた。經濟的ストライキの參加人員數は、一九〇六年にはストライキ總人員數の一〇分の四に、一九〇七年は一〇分の三に減少した。されば、政治的ストライキと經濟的ストライキとは相互に助け合ひ、一方の鬪爭形態は他方の力の源泉となつてゐる。これ等二種のストライキの密接な結合なしには、眞に廣汎な大衆運動、全國民的意義を有する運動は不可能である。運動の發端にあつては、しば〳〵經濟的ストライキは、おくれたる大衆を呼びさましめ、搖り動かし、運動を一般化し、これをより高い段階に進める力があるものである。

そこで譬へば、吾々は一九〇五年第一四半季においては、經濟的ストライキが政治的ストライキに著しく優つてゐるのを見る。即ち、經濟的ストライキに六〇萬四〇〇〇人の參加者があつたに對し、

政治的ストライキはたつた二〇萬六〇〇〇人である。一九〇五年の第四四半季においては、この關係は逆轉した。即はち、經濟的ストライキ四三萬人に對し、政治的ストライキに八四萬七〇〇〇人の參加者があつた。このことは、運動の當初に當つては多くの勞働者が經濟鬪爭を前面に押し出したのに、最高の飛躍期においてはその逆が妥當したことを物語る。けれども經濟的ストライキと政治的ストライキとの結合は、全期間を通じて見られた。この結合なしには、吾々は今一度繰り返えすが、眞に偉大な、高い目的を實現する運動は不可能である。

勞働者階級は、政治的ストライキにおいては全國民の指導階級として登場する。プロレタリアートはこの場合、ブルジョア社會における諸々の階級中の一つとしての役割ではなく、制覇者の、換言すれば指導者、嚮導者、前衛の役割を演ずるのである。運動に顯現される政治的理念は、全國民的性質をとる、即はち、それは全國民政治生活の基本的な、最も決定的な諸條件に觸れるのである。政治的ストライキのこの性質は、一九〇五年から一九〇七年に到る時代に關するすべての科學的研究が確言してゐるが如く、あらゆる階級の關心、就中いふまでもなく最も廣汎多數にして最も民主主義的な人口層、即はち農民階級その他の關心を運動に向つて喚び起こしたのであつた。

他方、勤勞大衆は、經濟的要求なく直接即刻彼の地位が改善されることなくして、一國の一般的「進歩」なるものを考ふることは、承知しないものである。勞働するものの經濟的狀態もまた改善さ

れるといふので、大衆は運動に引き込まれ、精力的にそれに參加し、高くそれを評價し、英雄的行動と自己犠牲と、偉大なる事業に對する歸依等とを發揮するのである。「平常」な場合の勞働者の生活條件は信ぜられないほど劣惡であるから、事態はそうならざるを得ないのだ。生活條件の改善のための鬪爭において、勞働者階級は道德的にも智識的にも、且つまた政治的にも飛躍的に高まつて、さらに彼等の偉大なる解放の目的を實現するより多くの能力をもつに到るのである。

商工省發表のストライキ統計は完全に、一般的活躍期における勞働者の經濟鬪爭の右の如き大なる意義を證明してゐる。勞働者の强襲が大なればなるほど、彼等の生活狀態の向上に關し彼等の收獲は益々大である。「社會の同情」もまた生活條件の改善も、昂揚せる鬪爭の結果である。自由主義者が（また淸算主義者（註三一）が）勞働者に向つて、諸君が「社會」の同情をかち得るとき諸君は强いといはうならば、マルキスト（註三二）はいふ、諸君が强いからして諸君は「社會」の同情を得るのである、と。ここに社會とは、ありとあらゆる民主主義的人口層のことであつて、卽はち、小ブルジョアジー、農民、勞働者生活に接觸してゐる智識階級、使用人等々である。

ストライキ運動は、一九〇五年において最も强大であつた。そしてそのとき示されたものは何んであつたか？　正さにこの年に勞働者は彼等の生活狀態の改善に關し最大の成果をかち得たこと、これである。政府の統計の示すところによると、一九〇五年のストライキ一〇〇件のうち最小の成果をも

達成せずして、換言すれば完全に慘敗したものは二九件だけである。一〇年間（一八九五年から一九〇四年まで）においては、ストライキ一〇〇件に對し五二件は全然成果を見ることなくして已んだ！それ故、運動の大衆的性質は鬪爭の成功率を高め、ほとんど二倍にした。

運動が衰ふると共に、だがまた、成功的鬪爭もより稀れになつた、卽はち、一九〇六年にはストライキ一〇〇件のうち三三件は些かも得ることなくして鬪爭を打ち切つた、若しくはより正確には、それは慘敗した。一九〇七年には一〇〇件中五八件であり、一九〇八年には一〇〇件中六六件にすら及んだ。

かくて數年にわたる統計の科學的資料は、經濟的ストライキと政治的ストライキとの結合の必要についての、眞に廣汎にして且つ全國民的なる運動におけるかゝる結合の不可避性についてのあらゆる階級意識ある勞働者自らの經驗と觀察とを、完全に證明してゐる。

現在のストライキの波は、この結論の正さを餘すところなく證明してゐる。一九一一年においてストライキ參加者は一九一〇年に比しほとんど倍加した。（五萬人に對する一〇萬人。）にも拘らずこの數字の意義は極めて少であつた。純粹な經濟的ストライキは、比較的「狹隘な」まだ全國民的意義を有たぬ事件に止つた。これに反し、現在萬人すべてに明かなることは、有名な四月事件（註三三）以後今年のストライキ運動は、まさにかゝる意義をかち得るに到つたことである。

第二章　黨と勞働組合

一　社會主義黨と無黨革命主義

「ノヴヤ・ジズニ」第二二號、二七號
（一九〇五年一一月二六日、一二月二日）より

急速に次から次へと新らしい人口居を捉えて行つたロシアにおける革命運動は、黨に所屬せざる多數の組織を發生せしめるに到つた。團結の要求は、それがより永年彈壓され迫害さるればさるゝ程、それだけ益々强力な力を以て押し出やうとするものだ。あれやこれやの、屢々定つた形も有たない如き、組織がひつきりなしに生れた。そして彼等の性質は恐ろしく獨特なものであつた。ヨーロッパの諸組織の有する如きキチンとした限界は見られない。勞働組合的團體が政治的性質を帶びてゐる。政治鬪爭は經濟鬪爭と融合し――譬へばストライキの形態において――以て混合型の一時的若くは多かれ少なかれ永續的な團體を作り上げた。

この現象は何を意味するのか？　社會民主黨はこれに對し如何なる態度をとるべきであるか？

嚴密なる意味の黨は、高度に發展した階級鬪爭の隨伴現象であり成果である。逆にまた、公然且つ

廣汎な階級鬪爭のためには、嚴密なる意味の黨の發展が必要である。されば階級意識あるプロレタリアートの黨、社會民主黨が、不斷に無黨主義とたたかひ、その根本原則によつて鞏められた一體たる社會主義勞働者黨の建設のために斷乎として努力するのは絶對に正しいのである。この努力は、資本主義の發展が全人民を諸階級に分裂せしめること益々甚しく、彼等相互の對立が益々激化すればするほど、大衆の間にその成功を收めること益々大である。

ロシアにおける現在の革命が多くの黨に所屬せざる團體を作つたし、また尙ほも作りつつあることは、容易に理解出來ることである。この革命は一個の民主主義革命である、卽はちその社會的經濟的內容から云へば一個のブルジョア革命である。この革命は絶對封建制度を倒し、以てブルジョア制度のために自由な道を開き、かくしてブルジョア社會のあらゆる階級の要求を實現する。この意味において、それは一個の一般的國民革命である。このことは勿論吾々の革命は決して階級革命ではないといふのではない。慥かにそうではない。それが打倒せんとするのは、ブルジョア社會の立場から見て既に老朽し、この社會と緣遠くなり、その發展をさまたぐる階級や族籍（カースト）である。だが國の全經濟生活が既にあらゆるその基本的特徵においてブルジョア化されてゐるのであり、人口の巨大な大衆が實際は既に資本主義的生活條件の下にすんでゐるのであるから、反革命的な要素は數にして見れば勿論あるかないか位小數で、それは「國民」に比較すればほんに「一と握り」にすぎないのである。それゆ

え、ブルジョア革命の階級的性質は不可避的に、絶對主義ならびに封建主義に對するブルジョア社會の凡ゆる闘爭といふ全國民的な、一見非階級的性質のうちに現はれざるを得ないのである。

ブルジョア革命の時代は、ロシヤにおいては他の諸國におけると等しく、資本主義社會の階級矛盾の比較的未發達といふことがその特色である。勿論ロシアにおいて資本主義は一七八九年のフランスは申すに及ばず、一八四八年のドイツよりも著しく高い發達段階にある。しかしながら些かも疑を容れないことは、純粋な資本主義的矛盾は吾が國においては未だ著しく「文化」とアジア主義との、ヨーロッパ主義と韃靼主義との、資本主義と封建主義との矛盾によつて隱蔽されてゐることである。かくして前面に押し出されるものは、その實現が資本主義を發展せしめ、それを封建主義の殘滓から洗ひ清め、プロレタリアートに對し、またブルジョアジーに對し生活條件闘爭條件を改善せしめるが如き要求なのである。

實際今日ロシアの各工場、各役所、各聯隊、各衞兵室、各教區、各學校等々で何千回となく起草されてゐる要求書や諸願書やドレアンセ（註三四）を見るならば、吾々は直ちにその壓倒的大多數が純粋の「文化要求」――こういふ表現が許されるならば――たることを見るであらう。そこで私がいひたいのは、こういふのはもと特殊な階級的要求ではいささかもなく初歩的な法的性質の要求にすぎないこと、即はち資本主義を破壞するためにではなく、反對にそれをヨーロッパ主義の埒内に編入し、

それを野蠻、粗野、腐敗その他の「ロシア的」農奴制遺制から解放する要求なのである。根本的においてプロレタリアートの諸要求もまた多くの場合、資本主義の埒内にて全く實現可能な改良に限られてゐる。ロシアのプロレタリアートが今日即刻要求してゐるものは、資本主義を葬むるものではなく、それを清め、その發展を急がし、強めるものなのだ。

慥かに資本主義社會におけるプロレタリアートの獨自な立場は、勞働者の社會主義への努力を、社會主義黨とのその同盟を、既に運動の最も最初の段階から自然生長的な力を以て、表面に押し出して來るものなのだ。だが本來の社會主義的要求はまだ將來のことで、日程に現はれるものは政治上では民主主義的諸要求、經濟上では資本主義の埒内にての經濟的諸要求である。プロレタリアートすら革命を最大限綱領においてではなく、謂はゞ最少限綱領の埒内で遂行してゐるので、謂んや農民階級、この凡ゆる壓迫されてゐる諸階級中最も數的に尨大である階級についてはいふを待たないのである。彼等の「最大限綱領」、彼等の究極目標は、資本主義の限界を超えず、資本主義は全部の土地を全農民と全民衆とへ讓り渡すことによつて、もつと廣く且つ豐かに發展するであらう。農民革命は今日一個のブルジョア革命である――この言葉がどんなに吾が小ブルジョア社會主義のセンチメンタールな騎士たちのセンチメンタールな耳に「侮蔑的に」響かうとも。

現在進行しつゝある革命の上來述べた如き性質から、黨に所屬せざる諸團體が出現することは全く

當然のことなのである。外見的無黨主義の樣相、無黨主義の外見が、それゆえに運動全體を色どることになる――だがもちろん外見上だけではあるが。「人間的」文化的生活に對する、結社に對する、自己の品位や人權市民權やの保持に對する慾求は、萬人を捉え、全階級を團結せしめ、あらゆる政黨的限界をはるかに飛び超え、黨員に編入されるほどにはまだなかなか高まり得ないが如き人々をも搖り動かす。目の前の初歩的に必要な權利や改革が退つぴきならないので、謂はゞ高遠な意圖や考慮は後方へ押しやられることになる。目前進行しつゝある鬪爭の過重評價――必然尤もな過重評價であり、こういふものがなくしては鬪爭に捷つことは不可能ではあらうが――は、不可避的にこの手近かな初歩的目的を理想化し、それをバラ色に彩り、進んではそれを幻想的な衣にくるみ勝ちなものである。單純な民主主義、ブルジョア的な通俗民主主義が社會主義と考へられ、社會主義として登錄される。全世界が謂はば「無黨」であり、全世界が唯だ一つの解放的（實際全ブルジョア社會を解放する）運動に卷き込まれ、全世界が「社會主義」の全く和やかな色彩を帶びることになる。特に民主主義運動における社會主義的プロレタリアートの指導的役割のゆえにそうなるのである。

無黨主義の思想が、かゝる狀態のもとにおいて一時的捷利を占めることは不可避である。無黨主義は强制通用力を以て流行スローガンとなる。けだし流行といふものはそれ自身は無力でいつも現實生活の後をついて行かざるを得ないものであるから。そして政界の「最流行」現象は、正さに無黨團

體、即ち無黨民主主義、無黨ストライキ主義、無黨革命主義であるやうに見える。

ところで問題となるのは、この無黨主義の事實、この無黨主義の思想に對し、種々なる階級の味方と代表者とは如何なる態度をとらなければならないか――主觀的な意味においてではなく、客觀的な意味において、如何なる行動をとらなければならないか、即ち自分自身がこれに對しどう行動すべきかといふのではなく、種々なる階級の利益と立場とからしてこの事實に對して如何なる態度が不可避的に生れて來なければならないか、である。

* * *

無黨主義は吾々が既に指摘したやうに、吾々の革命のブルジョア的性質の所産或ひはその表現である。ブルジョアジーは無黨主義以外のものに贊成することは出來ない。けだし、ブルジョア社會の自由のために鬪爭しつゝあるものの間に黨が缺如してゐることは、このブルジョア社會自體に對する新らしい鬪爭が未だ發生してゐないことを意味するからである。自由のために「無黨的」鬪爭を行ふものは、この自由のブルジョア的性質を把握しないものか、またはこのブルジョア制度を神聖化するものか、またはそれに對する鬪爭を延期し、その完成を無限のかなたにまで延期するものか、何れかである。そしてこれと反對に、意識的にか無意識的にかブルジョア制度の立場に立つものは、無黨主義の思想に引きつけられざるを得ないのである。

階級分裂を基礎とする社會においては、相敵對する階級間の鬪爭はその發展の一定段階において不可避的に政治的鬪爭にならざるを得ない。諸階級の政治鬪爭の最も完成した、最も纒まつた、且つ最も明確な表現は、黨の鬪爭である。無黨主義とは、黨の鬪爭に對する無關心の謂ひである。だがこの無關心たるや中立と鬪爭の抑制と同意語ではない、けだし階級鬪爭においては決して中立といふことは有り得ず、吾々は資本主義社會において生産物や勞働力の交換に參加することを「抑制する」ことは出來ないからである。交換はだが不可避的に經濟鬪爭を生み出し、ついではまた政治鬪爭をも生み出す。それゆえ鬪爭に對する無關心とは、實際においては決して鬪爭からの隔在抑制または中立の謂ひではない。無關心とは、强いもの、支配權をもつてゐるものの暗默的支持である。その顚覆前、十月革命中、專制主義に對しロシアで無關心であつたもの、彼は暗默のうちに專制主義を支持したのである。今日のヨーロッパにおいて、ブルジョアジーの支配に對し無關心であるものは、暗默のうちにブルジョアジーを支持するものである。自由のための鬪爭はブルジョア的性質のものだと刻印づけることに無關心なものは、この鬪爭におけるブルジョアジーの支配を、正さに發生せんとする自由なロシアにおけるブルジョアジーの支配を暗默のうちに支持するものである。政治的無關心とは、政治的飽滿のことである。無關心な態度を一片のパンに對してとるものは、飽を足つてゐる者のみである。飢えたるものはしかし一片のパンの問題においても常に「黨を作る」であらう。一片のパンに對する

「無關心、無頓着」は、當人がパンを必要としないことを意味するのでなく、この男は絶えずパンを充分與えられて居り、パンの不足を一度も感ぜず、役は飽滿者の「黨」において充分手當して貰つてゐることを意味するのである。無黨主義とはブルジョア社會においては、飽滿者の黨、支配者の黨、搾取者の黨へ所屬してゐることの僞善的、假裝的、消極的表現にすぎない。黨に所屬せざるのはブルジョア的思想であり、黨に所屬するのは社會主義的思想である。この原則は、大體において、あらゆるブルジョア社會に適用される。たしかに、人々はこの一般的眞理を個々の特殊問題や特殊な場合に適用することは知つてゐるに相違ない。だが、ブルジョア社會全體が封建主義と絶對主義とに敵對して立ち上つてゐる時にこの眞理を忘れるのは、實際において、ブルジョア社會の社會主義的批判の完全なる放棄を意味するものである……

社會主義者が超黨派的團體に加入することは、許さるべきであるか？ 若し許さるとせば、如何なる條件のもとにおいてであるか？ 如何なる戰術を吾々はかゝる團體においてとるべきであらうか？

第一問に對して、吾々は無條件的原則的否定を以て答ふるわけには行かない。社會主義者が黨に所屬せざる（卽ち、多かれ少なかれ意識的若くは無意識的なブルジョア的）團體へ參加することは、如何なる場合でも、また如何なる條件のもとにおいても許されないといふとそれは間違であらう。民主主義革命の時代において、特定の場合に黨外諸團體へ參加することを放棄することは、民主主義革命

への参加を放棄すると同意義となるであらう。だが些も疑を容れざることは、社會主義者はこの「特定の場合」を狹く限界しなければならないこと、かゝる參加をば全く特定の制限的條件の下においてのみ許容し得ることである。何故といふのに、黨に所屬せざる諸團體は既に述べたやうに、階級鬪爭の比較的未發達から生れるものだからであり、他方嚴密な政黨分裂は、階級鬪爭を意識的な明瞭な一定の原則的鬪爭にするための條件の一つであるからである。

プロレタリア黨の原理的政治的獨立性の保持は、社會主義の絕えず變らざる無條件的義務である。この義務を履行しないものは、彼の「社會主義的」(言葉の上の社會主義的)信念が如何に純粹無垢であらうとも、彼は實際において社會主義者たることを已めたものである。黨外團體への加入は、社會主義者にとつては唯だ例外としてのみ許される。この參加自體の目標ならびにその性質、その條件等は、餘すところなく基本的任務に從屬しなければならない、即ち社會主義革命の意識的指導のための社會主義プロレタリアートの準備と組織といふ基本的任務に。

事情は吾々を驅つて、黨外諸團體へ參加することを餘儀なくせしめることがある、特にプロレタリアートが優れた役割を演ずる民主主義革命の時代においてはそうである。かゝる參加は譬へば、ボンヤリと民主主義的見解を抱いてゐる聽衆の前に社會主義を宣傳するといふ利益や、反革命に對する社會主義者と革命的民主主義者との共同鬪爭といふ利益においては、必要であることが示される。第一

の場合においては、かゝる參加は吾々自身の意圖の勝利を助ける一手段たり得るであらう。第二の場合においては、特定の革命的目的を達成するための一個の戰鬪協定たり得るであらう。二つの場合とも、參加は單に一時的なものたるにすぎない。二つの場合とも參加が許されるのは唯だ、勞働者黨の獨立性が完全に保證され、黨外團體またはソヴェートに「選出され」たる個人またはグループが、全黨による無條件的統制と指導とに從ふ場合のみである。

吾が黨が秘密に活動してゐる限り、かゝる統制と指導とを果して行くことは、怖るべきしば〳〵ほとんど越ゆべからざる障害に出會はしたのであつた。黨の活動が益々公然となつて來た現在においては、吾々はこの統制と指導とを最も廣汎に實現することが出來、また實現すべきである、そしてただに「幹部」のみでなく、黨の最下層に至るまで、黨に所屬してゐる全組織勞働者にまで無條件的に實現すべきである。黨に所屬せざる組合またはソヴェートに於ける社會民主主義者の活動についての報告、かゝる活動の條件と任務とについての報告、かゝる活動に基因する各種黨機關の決議は、無條件的に勞働者黨の實踐のうちに編入されなければならない。黨全體のかゝる眞實の參加、この種萬般の行動統制への參加こそ實に、一般民主主義的行動に對し眞の社會主義的行動を對立せしめるものである。

吾々は黨に所屬せざる諸團體において、如何なる戰術をとるべきであらうか? 第一に獨立な結び

つきを作るために、また吾々の全社會主義綱領を宣傳するために、凡ゆる可能性を利用することである。第二に、民主主義的變革の完全且つ斷乎たる實現といふ立場から最も手近かな政治的任務を規定し、民主主義革命における政治的スローガンを與へ、闘爭的革命的民主主義が小賣商人的自由主義的民主主義と異なり實現しなければならない改革の「綱領」を掲げることである。

吾々がこういふ方法で事に當つた場合にのみ始めて、吾が黨員が今日は勞働者により、明日は農民により、また明後日は兵士によりなどして作られるところの無黨革命諸團體へ參加することは、許されるのであり、また效果があるのである。吾々がかく行動して始めて、吾々はブルジョア革命における勞働者黨の二重的任務に善處し得る狀態となるのである。ここで二重的任務とは即ち、民主主義的變革を最後まで徹底せしめること、且つ社會主義プロレタリアート、即ち自由を資本の支配顚覆のためのその無慈悲的闘爭に役立たしめるところのかのプロレタリアートの前衛團を擴大鞏固にすること、これである。

二　黨と組合との關係に關するボルセヴイーキの最初の決議

一、社會民主黨は常に經濟闘爭をプロレタリアートの階級闘爭の一組成分子として見做す。

二、凡ゆる資本主義國における經驗がこれを示してゐる如く、經濟闘爭遂行のための勞働者階級の

最も合目的的な團體は、廣汎な勞働組合である。

三、現在ロシア勞働者大衆の内部には、勞働組合的團結の強い傾向が現はれてゐる。

四、勞働者大衆の地位の永續的改善のためとその本當の階級的組織を鞏固にするためとの經濟闘爭は、この經濟闘爭とプロレタリアートの政治闘爭との正しい結合の條件の下においてのみ達成され得る。

以上の諸理由を以て、

吾々は次の意見に一致し、大會に次の如く決議することを提案する。

一、凡ゆる黨機關は、黨外勞働組合の創立を促進し、黨に組織されてゐる當該職業の代表者をそれに參加さすやうに努力すべきである。

二、黨は出來得る限り、組合に組織されてゐる勞働者をプロレタリアートの階級闘爭と社會主義的任務との精神に教育しあげ、以て黨はその活動によつてこの組合内に指導的地位をかち取り、この組合を一定の前提の下においては結局黨に公然加入せしめ——といつて非黨員を追ひ出すのではなく——るやうに、努力しなければならない。

三　中立の根據について

論文「勞働組合の中立について」より。――「プロレタリイ」第二二號、一九〇八年二月一九日（三月四日）

……社會主義黨と勞働組合との關係についてこの決議は、重大な意義を有つてゐる。スツツトガルト大會（註三五）の決議は、カウツキーが正當に觀察して居るやうに、またこの決議を讀んだあらゆる人々が自分でも確信し得るやうに、「中立」の原則的承認の問題について終に決定的斷案を下した。中立若しくは無黨主義については、決議中一語も含まれてゐない。反對に、勞働組合と社會主義黨との密接な結合の必要、この結合を鞏固にすることの必要が充分決定的に認められてゐる。

中立の原則は、スツツトガルト大會において、ドイツの代議員の半數、しかもその勞働組合の代表者が日和見主義的立場を最も決定的に代表したので、その有害な方面を曝露した。中立に關する宣傳はドイツにおいては實際、危險な結果を示した、卽ち、それは社會民主黨内の日和見主義に手助けしてやつたからである。こういふ事實は今後清算されなければならない、殊にプロレタリアートに勞働組合運動の中立を推賞するところのプロレタリアートのブルジョア民主主義的忠告者がウヨ〳〵してゐるロシアにおいては、そうである。

一般にスツツトガルト大會は、多數の最も重要な問題において、國際社會民主黨内の日和見主義派と革命主義派とを明確に對立せしめ、且つこれらの諸問題を革命的マルクス主義の意味において解決

した。この大會の決議――討論によつて解明されたが――は、あらゆる宣傳家煽動家の必携物でなければならない。スツツトガルトにおいて達成された仕事は、萬國プロレタリアートの戰術の統一と革命的鬪爭の統一との點において、一大前進を來さしめた。

吾々の全黨は今や、勞働組合における仕事は中立の意味においてでなく、勞働組合と社會民主黨との出來得る限り密接なる接近の意味において、行はれなければならないことを承認する。また、勞働組合の黨的性質はひとえに社會民主主義者の勞働組合内部における活動によつてのみ達成され得ること、社會民主主義者は勞働組合内に鞏固な細胞を作らなければならないこと、さらに合法的勞働組合の建設が不可能なところにおいては非合法的組合を作らなければならないことを、承認する。

スツツトガルト大會の決議は、カウツキーがライプチツヒ勞働者に對する彼の報告に於て述べてゐるやうに、中立の原則的承認の問題を決定的に片づけた。階級對立の前進的發展、最近あらゆる國々におけるその尖鋭化、ドイツにおける永年の經驗――ドイツでは中立の政策は、特別なキリスト教的自由主義的組合の擡頭を些かもさまたげなかつたばかりでなく、勞働組合内における日和見主義を强めた――勞働組合と政黨との共同一致的前進を要求してゐるプロレタリア鬪爭の特別領域の擴大（西歐におけるプロレタリア革命の將來可能な形態の雛型としてのロシア革命に於ける大衆ストライキと革命運動）、凡てこれらのことは中立理論からその根柢を掃ひ去るものであつた。

プロレタリア黨の内部においては、現在中立の問題は何等特別大きな論爭を惹き起こしそうには見えない。吾が國の社會革命黨（註三六）の如き種類の非プロレタリア的、似而非社會主義的黨派の場合はこれと異なる、この社會革命黨は實際は「智識階級と進歩的農民のブルジョア革命的黨派の最左翼」を代表するものである。

甚だ特色のある事柄は、スツツトガルト以後中立の思想を吾々の間では社會革命黨とプレハーノフ（註三七）のみが擁護してゐることである。而かもその擁護たる甚だ不手際に……

プレハーノフは、勞働組合の中立はドイツの修正主義者（註三九）によつて擁護されてゐるといふルナチヤルスキー（註三八）の指示をひつぱつて來て、これに答えて曰く、

「修正主義者は、勞働組合は中立でなければならないといふ、そして以て正統派社會主義に對する闘爭に勞働組合を利用することを知つてゐるのである。」

そしてプレハーノフは結んで曰く、

「勞働組合の中立を止揚してもこの場合何の役にも立たない。吾々が勞働組合を黨と密接な形式上の從屬關係においたとしてすら、黨内にはだが修正主義の「イデイオロギー」が勝利したとするならば勞働組合の中立の止揚は「マルクス批評家」の新らしい捷利を意味するに過ぎないであらう。」

この議論はプレハーノフの好んで行ふ方法、即ち問題を回避し、論爭の本質を抹殺する模範例である。黨内に事實修正主義者のイデイオロギーが捷利を占めたのであれば、それは正さに勞働者階級の社會主義黨たることを已めるであらう。それゆえ、かゝる黨派が發生すること、如何なる闘爭と如何なる分裂とがその場合生ずるかは、全然問題ではないのだ。問題は、凡ゆる資本主義諸國において社會主義黨と勞働組合とが存在することであり、吾々の任務は兩者の基本的關係を規定することである。ブルジョアジーの階級利益は、不可避的に、勞働組合を現存秩序の地盤の上におけるちつぽけな狹い活動に限り、それを社會主義とのあらゆる結合から遠ざけやうとする努力を生むものである、そして中立理論はこういふブルジョア的努力のイデイオロギー的なころもである。社會民主黨内における修正主義者は資本主義社會では、いつもこういふ風にやつて行かうとするものだ。

確かに、政黨的、また勞働組合的勞働者運動の當初においては、ヨーロッパにおいて勞働組合の中立に吾々は味方することが出來た、即ちプロレタリアートの闘爭が比較的未發達であり、ブルジョアジーの勞働組合に對する組織的働き掛けが缺けてゐる頃には、この闘爭の本來的地盤を擴大する一手段としてである。今日國際社會民主黨の立場からして勞働組合の中立に味方することは、全く當を得てゐない。プレハーノフの「マルクスもまた今日ドイツにおいて勞働組合中立の味方たるであらう」といふ保證を、唯だ吾々は笑つて讀めばいい、かゝる議論がマルクスの說明全體と彼の學說の全精神

とを無視して、マルクスからの一片の「引用」を一面的に解釋した結果の上に立つてゐるものである以上、特にそうである。

「私は中立に贊成する、即ち、ベーベル（註四〇）がそれを理解した如き意味においてであつて、修正主義的意味においてではなく」とプレハーノフは書いてゐる。こういふことをいふのは、ベーベルにかけて誓つて、而かも泥濘を匍匐することなのだ。疑ひもなくベーベルは國際的プロレタリア運動において優れた權威者であり、練達した實際的指導者であり、革命的闘爭のための要求に最も純な感情をもつた社會主義者であるからして、百中九九までは譬ひ踏み間違えたとしても自分で泥濘から出る道を發見し、彼に從ふ事を欲するものをも引き連れて拔け出る事は出來るであらう。ベーベルは、ブレスロウにおいて（一八九五年）ヴォルマール（註四一）と提携して修正派の農業綱領を擁護したとき、間違つた。彼は、エッセンにおいて防禦戰爭と攻擊戰爭との原則的差異を主張したとき、間違つた。彼は、勞働組合の「中立」を原則にまで高めたとき、間違つた。吾々は喜んで信ずる、若しプレハーノフがベーベルのお伴をしてのみ泥濘を匍匐するのであるなら、そうしば〳〵踏み迷ふことなく、よし踏み迷つたとしても長い時間ではないであらうことを。にも拘らず吾々は、ベーベルが間違つた丁度その點で彼の眞似はすべきではない、と思つてゐる。

人はいふ——そしてプレハーノフは特にこれを强調する——、中立はその物質的地位が改善せられ

ねばならないといふ考にまで到達した凡ゆる勞働者を組織するために必要だ、と。だがこういふことをいふものは、階級闘爭發展の今日の段階は絶對不可避的に、この改善を資本主義の埒内において如何にして獲得するかといふ問題においてさへ「政治的相違」を生み出さずにはおかないものであることを、忘れるものである。勞働組合中立の理論は、勞働組合と革命的社會民主黨との密接なる結合の必要をとく理論と違つて、不可避的に、この改善のためにプロレタリアートの階級闘爭を鈍らすやうな手段を選らばしめるものである。これについての最もわかり易い例は、（序でにいへば、近代勞働者運動の最も興味ある話の評價と關連して）、プレハーノフがその中で中立を擁護した「ソウレメニー・ミル」（註四二）の同じ輯である。この中に吾々はプレハーノフと相並んで、有名なイギリスの鐵道從業員の指導者にして、勞働者と會社理事との紛爭を妥協を以て終結せしめたところのリヒヤード・ベルの讃美者としての、E・P氏を見るのである。ベルは、「全鐵道從業員運動の精神」と名づけられてゐる。

「何等の疑も有り得ないことは」とE・Pは書いてゐる、「ベルは彼の落ちついた、思慮深い、言尾一貫した戰術で以て鐵道從業員の無條件的信頼をかち得たのであつて、その組合員は躊躇なく何處までででも彼について行く用意をしてゐる。」

こういふ立場は決して偶然ではない。それは、本質上、プロレタリアートの解放のために役立つで

あらうところの闘爭のためにではなく、その地位の改善のために勞働者を結合することを以て最上策と考へてゐる中立主義と結びついてゐる。

だがこの立場は、イギリス社會主義者の見解とは一寸も一致してゐない、イギリスの社會主義者は、ベルの賞讃者が同一雜誌において有名なメンセヴイーキ・プレハーノフやジョルダンスキー一味と矛盾することもなく書いてゐることを知つたならば、恐らく驚嘆することであらう。

イギリスの社會民主主義紙「デヤスティス」は、ベルと鐵道會社との妥協を機として一月六日のその社說に書いて曰く、

「ほとんど凡ての勞働組合がこの謂ゆる平和條約を排擊したが、この點において吾々は完全に一致してゐる。……こういふ條約は勞働組合からその存在の凡ゆる意義をなくするものである。……こういふ背理的な協定は勞働者を拘束することは出來ない、彼等は充分それを拒否せんとするであらう。」

そして一一月二三日の次の號において、ベルネットは「また賣る！」と題する論文のうちに書いて曰く、

「三週間前までは、鐵道從業員聯合組合はイギリス中で最も有力な勞働組合であつた。今それは一個の共濟團體の水準にまで墮落した。……そしてこういふ飛躍が行はれたのは、鐵道從業員が

鬪爭し、そして慘敗したからではなく、その指導者が故意にか、または無智からか戰はない前に既に資本家に彼等を賣り渡したからである。」

そして同紙の編輯部は附言していふ、「ミッドランド鐵道會社の一賃銀奴隷」から同樣の寄書があつた、と。

それともそれは一個の「遣り過ぎ」で、「餘りに革命的すぎた」社會民主主義であつたためか？ 否である。未だ一度も「社會主義」を稱したことのない穩和な「獨立勞働黨」(ILP)の機關紙たる「レーバー・リーダー」は一一月一五日號において、全資本家新聞（急進派の「レイノルド新聞」から保守黨の「タイムス」に到るまで）がベルに浴せかけた讃辭の答えとして、ベルの作つた協定は「勞働組合史に嘗つて現はれた最も輕蔑すべきもの」であるとし、且つリヒヤード・ベルを勞働組合運動の「ペゼン元帥」(註四三) と名づけた一組織鐵道從業員の手紙を載せてゐる。他の一鐵道從業員は、「勞働者に七年間勞役の判決を下したこの惡意ある協定のゆえに、ベルの責任を問はなければならない」ことを要求してゐる。そしてこの穩健な新聞の編輯部は、同紙同號の社說において、この妥協を「イギリス勞働組合運動のセダン」と呼んでゐる。「國民的規模において組織された勞働の威力を示威するに、これほどの好機會は嘗つてなかつたのである。」勞働者の間には、「嘗つて見さる程の情熱」と戰鬪意志が支配してゐた。社說は結びとして、勞働者の窮乏と饗宴準備中のロイド・ジョージ（註四四）

（資本家の從僕たる役割を演じた一大臣）とペルの凱旋との咬みつくやうな對立をもつて來てゐる。

最も極端な日和見主義者たるフェビアン協會――一個の純粋な智識階級の團體――員（註四五）だけが、この協定に贊意を表し、フェビアンに好意を有つてゐる雜誌「ニュー・エーヂ」をすら恥しさのために眞赤にせしめた程である。この「ニュー・エーヂ」は、保守黨ブルジョアの「タイムス」はたしかにフェビアン協會中央委員會の當該宣言を全文掲載したことは事實だが、こういふ先生達を除いては「唯つた一つの社會主義的團體も、唯つた一つの勞働組合も、唯つた一つの有名な勞働者の指導者も、」妥協に贊成を表明しなかつたことを、認めなければならなかつた。これは、プレハーノフの協働者E・P氏によつて示された、中立の適用の一模範例である。「政治的相違」は問題とならず、與えられた社會における勞働者の地位の改善が問題となつてゐる。鬪爭の放棄と資本の前への無條件的降伏の代償を拂つての改善に味方したものは、イギリスの全ブルジョアジーとフェビアン協會員とE・P氏であり、勞働者の集合的鬪爭の味方は――凡ゆる社會主義者と勞働組合の勞働者とであつた。プレハーノフはそれでも尙ほ續けて今日も、中立を說敎し、勞働組合と社會主義黨との密接なる協同行動に贊成しないであらうか？

四　中立主義に對する鬪爭――革命的マルクス主義者の初步的任務

「スイス社會民主黨內におけるチンメルワルド左翼の任務」（一九一七年）より

……勞働者階級、使用人等の經濟的團體の「中立」理論との決定的斷交。戰爭によつて特に明瞭に證明さるゝに到つた眞理、卽ち、謂ふところの「中立」とはブルジョア的僞瞞であり、僞善であること、それは事實においてはブルジョアジーと特に帝國主義戰爭の如き彼等の下賤な營みとに對する受動的降伏を意味するといふ眞理についての大衆の啓蒙。勞働者階級または小ブルジアジー乃至使用人の最下層の凡ゆる團體內における社會民主主義的活動の强化、凡ゆるこれらの組合內における特別な社會民主主義的グループの形成、凡ゆるこれ等の組合內で革命的社會民主主義が大多數を占め、指導權を握るやうな狀態への組織的努力。この條件が革命的鬪爭のためには特に重要だといふことについての大衆の啓蒙。

五　革命家は反動的勞働組合の內部において活動すべきであるか？

「共產主義左翼小兒病」より、一九二〇年

ドイツの「左翼」にいはせると、この問題に對する無條件的な否定的解答は既定の事實である。彼等の意見によれば、「反動的」「反革命的」勞働組合に對する彈劾と怒號とだけで、黄色な、社會愛國主義的、協調的、レギエン的、(註四六) 反革命的勞働組合内における革命家の活動、共産主義者の活動が不必要であり、且つ許容出來ないものでさへあることを證明するには、充分なのである。

だが、ドイツの「左翼」がこの戰術の革命的であることを如何ほど確信してゐやうとも實際においてそれは根本的に間違であり、カラ文句以外の何物をも含まない。

このことを明かにするために、私は私の經驗から始めやう。——これは、ボルセヴイーキの歴史と現在の戰術との中で一般に適用出來るもの、一般的意義があり、一般的に妥當するものを西歐に適用しやうといふ目的を有つた、この論文の一般的計畫に則ることでもある。

指導者——黨——階級——大衆の交互關係、從つてまたプロレタリアートとその黨との獨裁が勞働組合に對する關係は、吾が國では現在次の如き具體的形態をとるに到つた。即ち、獨裁はソヴエートに組織されたプロレタリアートを通じて實現せられ、このプロレタリアートは最近黨大會(一九二〇年四月)の報告によれば黨員六一萬一〇〇〇人を數ふるボルシエヴイーキの共産黨によつて指導せられてゐる。黨員の數は十月革命以前と同じくその後も動搖甚しく、以前は、一九一八年や一九一九年においてすら著しく少なかつた。吾々は黨が餘りに膨脹しすぎることを恐れる、けだし政府黨となる

とどうしても射殺にしか値しない樣な野心家や詐欺漢がまぎれ込まうとするからである。

最近吾々が黨の門戸を廣く開放したのは——唯だ勞働者と農民のためにのみであり——またユーデニツク(註四七)がペテルスブルグから數露里のところまで、そしてデニキン(註四八)はオレル(モスクワから三五〇露里の距離)にまで進軍して來たとき(一九一九年の冬)、即ち、ソヴエート共和國が怖るべき、致命的な危險におびやかされ、共産黨に加入したところで投機者や野心家、詐欺漢その他一般無節操漢にとり決して有利な立身出世の見込を與えなかつた(寧ろ絞首臺や拷問の見込)ときであつた。毎年黨大會を招集する(最近は黨員一〇〇〇人に對し一代議員の割合)黨は、黨大會によつて選出される一九名の成員からなる中央委員會によつて指導される。さらに常務はモスクワにおいてもつと狹い範圍の同志によつて、即ち、それぞれ五名の中央委員から成り、中央委員總會によつて選出されたる謂ゆる「組織局」ならびに「政治局」によつて執行される。從つてここに一個の純粋な「寡頭政治」が生れる。重要な政治的若しくは組織的問題の唯一つとして、黨中央委員會の指導的訓令なくしては、吾が共和國の如何なる政府機關によつても決定されないのである。

黨はその活動に際して直接勞働組合によつて支持されてゐる。勞働組合は現在、最近大會(一九二〇年四月)の報告によると、成員四〇〇萬人以上を數え、且つ形式上は黨と關係がない。實際は無數な組合やとりわけ勿論全露勞働組合中央部または事務局(全露勞働組合中央評議會)やのあらゆる指

導機關は、共產黨員から成り、彼等は黨のあらゆる指令を實現してゐる。ここからして、全體としては形式上共產黨に所屬してゐない、彈力的な、比較的廣汎な、甚だ强力なプロレタリアートの機關が生れることになり、これを通じて黨は階級ならびに大衆と密接に結びつき、これを通じて黨の指導の下に、階級の獨裁が實現されるのである。勞働組合との密接な連絡なくして、その熱心な支持なくして、唯だに經濟的建設のみならずまた軍事的建設においてもその犧牲的活動なくして、國を支配し獨裁を實現する——こういふことは二年は愚か、たつた二ヶ月ですらも勿論決して吾々に出來なかつたであらう。この密接な連絡が實際においては甚だ複雜且つ多岐に亘つた活動を意味したことは、いふまでもない。即ち、宣傳、煽動、勞働組合の指導的役員とばかりでなく一般に勢力のある役員との適時且つ頻繁な協議、今日尙ほ少數ではあるが一定數の追隨者を有し、彼等をけしかけてありとあらゆる反革命的所業——（ブルジョア）民主主義のイデオロギーの擁護、勞働組合の獨立（プロレタリア國家權力からの獨立）の宣傳から始めてプロレタリア的規律のサボタージュその他に到るまで——に誘はんとするメンセヴイーキに對する決定的鬪爭、これである。

吾々は大衆との結合は勞働組合だけを通じてでは、不充分であると考へる。實踐は吾が國においても革命の進行中、黨外の勞働者協議會や農民協議會といふ機關を生み出した。この機關を吾々は出來得る限り支持し、發展せしめ、擴大せしめ以て、その助けによつて大衆の氣分を追求し、彼等に近づき

彼等が問題としてゐる問題に答え、彼等のうちから國政に當る有能な役員を選拔するのである。國政監督人民委員會の「勞働者農民監察局」への轉化についての最近の指令の一つにおいて、この種の黨外協議會に各種檢閲のため國政監督員を選出するの權能が賦與せられた。

さらに、いふまでもなく、黨の全活動は勤勞大衆をその職業に差別するところなく包含してゐるソヴエートを通じて執行される。ソヴエートの郡大會は、ブルジョア世界の最もすぐれた民主主義共和國においても嘗つて見られなかつた如き民主的機關であつて、この大會（これを黨は出來る限り注意深く目にとめて居る）を通じて、また階級意識を有する勞働者を農村におけるあらゆる職務に當らせるために絕えず派遣することによつて、都市勞働者の獨裁、富裕な、ブルジョア的な、搾取し投機する農民階級に對する組織的鬪爭等が實現されるのである。

以上が「上」から見た、獨裁の實際的具體化といふ見地から見た、プロレタリア國家權力の一般的機構である。讀者は望むらくは次のことがおわかりになつたであらう。即ち、この機構に習熟し、この機構が過去二五年間に小さな、非合法的な、地下的サークルから生長して來た次第を見て來てゐるボルセヴイーキにとつては「上」からだとか「下」からだとか、指導者の獨裁かそれとも大衆の獨裁か等々のあらゆる言說は、云つて見れば人間には左足と右手と何れが有用かといふ論爭とひとしく、笑ふべき、小兒じみた囈語にしか思えないこと、これである。

同様笑ふべき、小兒じみた囈語と吾々には思はれざるを得ないのは、ドイツ「左翼」の次の如き題目についての業々しい、驚くべく博學にしてまた恐るべく革命的なお饒舌である。曰く、共産主義者は反動的勞働組合の内部で活動することは出來ず、また活動してはならない、曰く、かゝる活動を放棄するは許さるべきである、曰く、人はかゝる勞働組合を去つて、無條件的に、全く新らしい、きれいさつぱりとした、純粋無垢な（多くの場合、恐らくは甚だ年若い）共産主義者によつて考へ出された「勞働者同盟」を創立しなければならない、等々。

資本主義が社會主義に遺産として殘すものは必ずや、一方では古い、數世紀かかつて出來上るに到つた、勞働者間の職業的手工的差別であり、他方では次の如き勞働組合である。即ちこの勞働組合たる、甚だ徐々に、永い永い年數を經て、より廣汎な、同業組合的色彩のより少ない組合、即ち産業別組合（全産業を包容し、工場別、手工業別、職業別などによらない）にまで發展することが出來るのであり、また發展するであらう、そうして以て、さらにはこの産業別組合を通じて、勞働者内部の分業の排除と、全面的に發展し全面的な教養を有つた人間、萬事をなし得る人間の教育、訓練、準備とに移り得る可能性が與えられるのである。この方向に共産主義は進み、また進まねばならぬ、そして其處にまで共産主義は到達するであらう、だが、それはづつと永い年月を經て初めてである。この充分發達し、終局的に確立され定形づけられた、充分に發展し成熟せる共産主義の來るべき成果を、今

日、實際に先き取りしやうとするのは、四歳の幼兒に、高等數學を教えんとする試みに相等しい。

吾々は社會主義の建設を、想像的な、特別あつかひに吾々が創造した人間材料を以てではなく、資本主義から吾々が相續した材料を以て、始めることが出來るのであり（またそうしなければならない。）これはいふまでもなく甚だ「困難」ではある。だが問題解決の他の凡ゆる企ては、眞面目なものではないので、全然それについて語るに値しないものである。

勞働組合は資本主義發展の當初においては、勞働者の分散と無力とから階級的結合への端初への過渡として、勞働者階級の一の巨大な前進であつた。プロレタリアートの階級的結合の最高形態、即ちプロレタリアートの政權獲得（それが指導者と階級ならびに大衆とを一個の全體に、不可分的なものに結合し得ない間は、それはその名に値しない）が生長し初めるや、勞働組合は不可避的に若干の反動的様相を示し、若干の同業組合的繩張り性や反政治主義への若干の傾向や、若干の怠け根性等を示し始めるものである。勞働組合を基礎としなければ、また勞働組合と勞働者階級の黨との交互作用を基礎としなければ、世界何處においてもプロレタリアートの發展は行はれなかつたし、また行はれ得なかつたのである。プロレタリアートによる政權の掌握は、階級としてのプロレタリアートにとり一大前進である、そして黨は益々、未來の方法のみによつてではなく新らしき方法によつても、勞働組合を教育し、それを指導して行かなければならない。そしてその際忘れてならないのは、勞働組合な

るものは以前と同様常に一個の必要な「共産主義の學校であり」、獨裁實現のためにプロレタリアートにとつての一個の準備學校であり、一國全經濟の管理を勞働者階級（個々の職業にあらず）の手に、進んでは全勤勞者の手に永久的に移して行くために必要な一個の勞働者聯合であること、また將來もづつとそうあるだらうこと、これである。

上述の意味における勞働組合の若干の「反動的樣相」は、プロレタリアート獨裁に際しては不可避的である。このことを見誤ることは、資本主義から社會主義への推移の基本的條件を完全に見誤ることである。この「反動的樣相」を恐れ、こういふものなくしてやつて行かう、それを飛び超えて行かうといふ試みを企てるのは、愚の骨頂である、何故といふのに、それは卽ち勞働者階級や農民のおくれた層や大衆を教育し、啓蒙し、訓練し、新生活に導くといふプロレタリアート前衛の任務を忘れることなのだから。他方、一層大きな間違ひは、勞働組合的な狹隘性をもつた勞働者は唯だの一人も居なくなり、同業組合的な職工組合的な偏見を有つた勞働者は唯だの一人も居なくなる時節まで、プロレタリアートの獨裁實現を延期しやうとすることである。政治家の技術（またその任務に對する共産主義者の正しき理解）は、正さに、プロレタリアートの前衛が成功を以て政權を獲得し得る、この掌握に際しまたその後において勞働者階級と非プロレタリア勤勞大衆の廣汎な層の充分なる支持を確保し得る、權力獲得後は益々廣汎な勤勞大衆を教育し訓練し誘導することによつて彼等の支配を鞏固にし

擴大し得る、條件と時期とを明確に認識するの點に存する。

加之、ロシアよりより進んだ諸國においては、勞働組合の若干の反動的樣相は、疑ひもなく吾が國よりもつと露骨に現はれて居り、また現はれざるを得ない。吾が國においてはメンセヴイーキは、正さに同業組合的狹隘性、勞働組合的利己主義と日和見主義とのゆえに勞働組合内に後楯をもつて居た。（そして極く小數の組合内には一部分今日尙ほさうである。）西歐のメンセヴイーキはもつと深く勞働組合の中に「根を下して」居り、そこに勞働組合的な、狹隘な、利己的な、化石した、我利我利の小ブルジョア的な帝國主義的考えをもち帝國主義によつて買收された、帝國主義によつて腐らされた「勞働者貴族」の、吾國の場合よりはるかに廣汎な層をつくり上げたのである。これは爭はれない事實だ。ゴンパース（註四九）に對する、西歐におけるヂューオー（註五〇）ヘンダースン（註五一）、メルレイム（註五二）、レギエン諸氏とその一味に對する鬪爭は、これと完全に相等しい社會的政治的類型を示してゐる吾が國のメンセヴイーキに對する鬪爭よりも比較にならないほどより困難である。この鬪爭は無慈悲的でなければならず、吾々はそれを吾々がなした樣に無條件的に最後まで、卽ち日和見主義と愛國社會主義とのあらゆる改善の見込なき指導者を完全に曝露し、彼等を勞働組合の外に放逐するに至るまで戰ひ拔かなければならない。この鬪爭がまだ一定の段階まで遂行される限り、吾々は政權を獲得することは出來ない（またそれが獲得の試みをなしてもいけない）。而してこの「一

定段階」は種々なる國々によりまた種々なる條件によつて同一でなく、それを正確に見てとることの出來るのは、それぞれ各國における思慮豐な、試驗づみの、經驗あるプロレタリアートの政治的指導者にして始めて可能なのである。(この闘爭における成功の尺度たる役割を吾が國で果したのは、就中一九一七年一〇月二五日のプロレタリアート革命後僅かにして行はれた一九一七年一一月の憲法制定議會への選擧であつた。この選擧においてメンセヴイーキは完全に打ちのめされた、それはボルセヴイーキの獲得した九〇〇萬票に對し、七〇萬票——後方カウカサスを加えて一四〇萬票——を得た。)

たが「勞働貴族」に對する闘爭を吾々が行ふのは勞働者大衆の名前においてであり、またこの勞働者大衆を獲得せんがためである。吾々が日和見主義的愛國主義的指導者に對して闘爭するのは、勞働者階級を吾々の側に引き寄せんがためである。この全く初歩的な全く明白な眞理を忘れるのは、馬鹿の沙汰であらう。そうして正さにこういふ馬鹿な眞似をしたのが、ドイツの「左翼」共産主義者であつて、彼等は勞働組合幹部の反動的反革命的精神から結論して曰く、——勞働組合からの脱退、勞働組合内における活動の拒否と、勞働者組織のための新案形態の創立!! と。これは、許すべからざる愚擧であり、共産主義者がブルジョアジーに示し得る最大な功績にひとしい。けだし、あらゆる日和見主義的、社會愛國主義的、カウツキー的な勞働組合指導者の如く吾が國のメンセヴイーキもまた、「勞働運動内部におけるブルジョアジーの代理人」(このことを吾々はメンセヴイーキについてづつと前から

ら主張して來た)またはアメリカのダニエル・レオン(註五四)一派の巧妙な極めて適切な表現に從えば「資本家階級の勞働副官」である。反動的勞働組合内では斷じて活動しないとは、未發達な乃至後れた勞働者大衆を反動的指導者の影響下に任すことであり、ブルジョアジーの代理人、勞働貴族または「ブルジョア化した勞働者」(イギリスの勞働者についての一八五二年のマルクスに宛てたエンゲルスの書簡を見よ)の影響下に任すことである。

正に共産主義者は反動的勞働組合に加入すべからずといふ馬鹿げた「理論」こそ、最も雄辯に「大衆」への影響の問題におけるこの「左翼」共産主義者のそそつかしさと、彼等の「大衆」呼ばりが濫用に終つてゐることを物語るものである。吾々が「大衆」に助力し、「大衆」の同情、親愛、歸服を獲得しやうと欲するのであれば、吾々は「指導者」(彼等は日和見主義者、愛國社會主義者として多くの場合、直接間接ブルジアジーならびに官憲と手を握つてゐる)の側からの奸策や詭計や凌辱や迫害を一つとして恐れてはならないし、また吾々は無條件的に大衆の居るところで活動しなければならない。吾々はあらゆる犧牲を拂ひ、絶大の障碍に打ち勝つて、プロレタリアートおよび半プロレタリアート大衆のゐる機關、團體、組合内における——これらの團體が極度に反動的であらうとも——組織的な執拗不屈な宣傳煽動を果し得なければならない。勞働組合と勞働者の協同組合(後者は少なくとも〳〵しば〳〵)こそ、正さに大衆のゐる團體である。イギリスでは勞働組合員數は、スエーデンの新聞

一フオルケツト・ダーゲン・ポリテイーケン」（一九一九年一〇月三日）の報するところによれば、一九一七年末から一九一八年末までに五五〇萬人から六六〇萬人までに、即ち一九パーセント増大した。一九一九年末には七五〇萬人を算した。私はフランスおよびドイツのこれに相應する報告を手許にもつてゐない。しかし一般に知れわたつてゐる如く、これらの國々においても勞働組合員數は非常な増加を示してゐる。

これらの事實は明白に、他の無數の現象によつても證明されてゐる事柄、即ち正さにプロレタリアート大衆、「下層」、後れたる層内における階級意識と團結力との増大を示すものである。イギリス、フランス、ドイツの數百萬勞働者は初めて完全な未組織狀態から初歩的な、低度な、最も單純な、最も近づき易い（まだ全くブルジョア民主主義的偏見に染み込んでゐる者にとつて）組織形態へ、即ち勞働組合へ這入りつゝある——このとき革命的であるが考への足らない共産主義者が傍に立つて叫んで曰く「大衆」「大衆！」と、そして勞働組合の内部で活動することを拒絶する!! 勞働組合は反動的であるとの口實の下に拒絶する!! 新らしい、さつぱりしたブルジョア民主主義的偏見からは自由であり、同業組合的勞働組合的罪障によつて汚されてゐないと自稱する「勞働者同盟」、口では廣汎なと稱しながら而かも加入條件としては唯だ（唯だ）「ソヴェート制度と獨裁との承認」のみを認める!! 勞働者同盟の案出!!

「左翼」革命家達の犯した此の大きい無思慮、革命にとつてのより大きい害惡を吾々は考ふることは出來ない。ロシア及び聯合國ブルジョアジーに對する未曾有の勝利後二年を經過せる今日のロシアにおいても吾々が、「獨裁の承認」を勞働組合加入の條件にしやうとしたならば、それは一つの愚舉であり、吾々は大衆に對する吾々の影響を失ひ、メンセヴイーキに手助けしてやることになるであらう。けだし、共産主義者の全任務は、後れたるものを確信せしめ得る點にあり、彼等に交はりながら活動し得る點にあり、彼等と自分と小兒じみた「左翼」スローガンで以て壞き隔てることではないのだ。

疑ふべくもなく、ゴンパース、ヘンダースン、デューオー、レギエン諸氏は、ドイツの「原則上の」反對派（神よかゝる「原則性」から吾々を守り給へ！）や或はアメリカのI・W・W（註五五）内部の若干の革命家達と同樣に、反動的勞働組合からの脫退、この組合内での活動の拒否を宣傳する「左翼」共産主義者たちに甚だ感謝してゐる。疑ひもなく、日和見主義の「指導者」諸君はブルジョア外交術のあらゆる詭計に訴え、ブルジョア政府や僧侶、官憲、法廷に援助を求め、共産主義者たちの勞働組合に這入る道を塞ぎ、勞働組合から全力を盡して彼等を追ひ出し、彼等のために勞働組合内部の活動を出來るだけ不愉快にし、彼等を罵り、嗾しかけ、迫害しやうとするであらう。吾々はすべてこういふものに對抗し、あらゆる犧牲を身に引き受けることが出來なければならないし、また勞働組合に入り込み、その中に止り、その中で如何なる事情の下においても共産主義的活動を營んで行くため

とあらば――必要なら――あらゆる種類の術策、詭計、非合法的方法に訴え、ほんとうのことをいはないでゐたり、かくしたりさへしなければならない。ツアーリズムの下においては一九〇五年まで、吾々は全然「合法的可能性」をもたなかつた。だが秘密警察の手先きツバトフ（註五六）が勞働者の集會や黒百人組型の勞働者團體を組織して、革命家を逮捕し、革命家に抗爭せんとするや、吾々はこれらの集會や團體に吾が黨員を派遣した（私は個人的に、すぐれたペトログラードの勞働者であり、ツアールの將校によつて一九〇六年に射殺されたる同志バブシュキンをおぼえてゐる）。これらの同志は大衆との結合をつくり上げ、そこで彼等の煽動を行ひ、勞働者をズバトフ（*）一味の影響から引きはなすことが出來たのであつた。勿論、特に強く根を下した合法的、立憲的、ブルジョア民主主義的偏見に染み込んでゐる西歐では、これはより困難である。だがそれはなし得るし、またなさねばならず、組織的になされなければならない。

*ゴンバース、ヘンダースン、ジューオー、レギエンはズバトフと一味で、唯だ違ふのはヨーロッパ的な衣裝をつけ、ヨーロッパ的な磨きがかゝつて居り、彼等の恥ずべき政策を遂行する方法が文明化され、洗練され、民主主義的な粉飾をしてゐるだけだ。

第三インターナショナルの執行委員會は、私個人の意見によると、反動的勞働組合不參加の政策を公然排擊し、共産黨インターナショナルのこの次の大會に次の提案を提出しなければならぬ。曰く、

共産黨インターナショナルはこの政策一般の排擊（かゝる不參加の無分別とプロレタリアート革命の事業のためのその甚しき害惡とについての詳細なる理由を附して）を宣し、直接的にか間接的にか、公然にか隱然にか、全部的にか部分的にか、それはとまれ――この誤つた政策を支持しつつあるオランダのトリブニスト（註五七）の態度の排擊を宣す、と。第三インターナショナルは第二インターナショナルの戰術と絶緣し、痛い問題を回避せず、抹殺せず、最も辛辣に投げ出さなければならない。吾々は「獨立黨」（ドイツ社會民主獨立黨）に全眞理を面と向き合つて告げたが、全眞理はまた「左翼」共産黨員にも告げられねばならない。

六　勞働組合における共産主義者の任務

「フランス社會黨の全員、フランスの階級意識あるプロレタリアートへ」宛てた共産黨インターナショナル第二大會の書簡より、一九二〇年七月二九日起草、

……フランスの勞働組合（シンヂケート）に對する吾々の關係の問題。この問題は非常に重要で、立ち入つて取り扱はれなければならない。諸君は吾々のテーゼならびにその他共産黨インターナショナルの公文書からして、反動的勞働組合の陣列から去り、この組合に背を向け、彼等に對立して何か新らしい、「一般的」勞働者同盟を組織することを吾々に提議してゐる「左翼」共産主義者達に對し吾

々は斷乎として排撃してゐることを、知つてゐるであらう。この吾々の見解はレギエン一派の自由な黄色的な、社會民主黨系の勞働組合についていはれるのみならず、またヂューオー一派を幹部とするフランスの勞働組合にも妥當する。これ等の勞働組合が不幸にしてレギエンやヂューオーに追隨するやうなことがあらうとも、吾々は革命家や共産主義者の大衆的勞働組合からの脱退に、反對である。革命家と共産主義者とは勞働者大衆のゐる所であれば、どこにでもゐなければならない。ロシアの共産主義者は勞働組合においては長い間小數者であつた。ロシアの共産主義者は、最も後れた、時には反動的な勞働者團體の内部でさへ彼等の理想のために闘うことを知つてゐた。

吾々はフランスにおける吾々の同志に、如何なる事情があらうとも勞働組合の埒内から去らないことを要求する。反對に、若し彼等が共産インターナショナルに對する彼等の義務を果さうとするのであれば、彼等は勞働組合内における活動を強めなければならないのである。

愛國社會主義者の最後の逃げ場は、現在正さに勞働組合である。政治的團體としての第二インターナショナルはカルタの家の如く崩壊したが、黄色組合のアムステルダム インターナショナル(註五八)は尚ほ裏切社會主義者にとつて重要な地盤である。アムステルダム黄色インターナショナルは今日世界革命のためには國際聯盟よりも尚ほ有害であり危險である。レギエン、ゴムパース、ヂューオーの助けをかりて、ブルジョアジーはアムステルダムインターナショナルから彼等の掠奪目的の道具とし

て、帝國主義戰爭當時の全世界の社會民主黨と同じものを作り上げやうと試みてゐる。

このことからして吾々共産主義者にとつては、勞働組合運動に十倍の注意を向ける義務が生ずる。吾々はこの勞働組合を、如何なる代償を拂つても資本家と裏切社會主義者との手から奪ひ取らなければならない。そのために吾々はこの勞働組合内にゐなければならず、そのために吾々は吾々の精鋭をそこに送らなければならない。

吾々の同志は勞働組合内に止るであらう、だが彼等はそこで孤立的に、散り散りばらばらに行動はしないであらう。吾々は各勞働組合内部に、各地區グループの内部に、一個の共産主義者のグループ、共産主義者の細胞を形成しなければならない。日常闘爭の地盤の上で吾々は勞働組合の内部において、大小さまざまなヂューオーの謀計をあばき出さなければならない。吾々は勞働組合の平組合員に目をつけなければならない。吾々は裏切社會主義者的指導者を勞働組合から追ひ出さなければならない。吾々は組織的な執拗な闘爭によつて裏切社會主義者とヂューオーの如き黄色社會主義者の影響から組合を次から次へと奪ひ取らなければならない。ロシアのボルセヴイーキは長年の活動において、この任務を果すことを知つた。十月革命の前夜においてすら尚ほロシアの共産主義者は勞働組合内では小數派であつた。それが權力を握り、階級意識ある勞働者に新らしい宣傳手段を手渡してやつた後、ロシアのボルセヴイーキは革命後の甚だ短日月のうちに勞働組合運動の壓倒的多數を獲得する

ことが出來た。この逆を全世界の共産主義者と革命家とは進まなければならない。

フロサル（註五九）は彼のモスクワよりの報告書中「C・G・T（註六〇）は革命を吾々（黨）なくして、吾々は革命をそれ（勞働組合）なくして遂行するであらう」と聲明してゐるがこの命題は少なくとも充分明かではない。革命はそれを欲しない人々の助けを借りては遂行され得ない。諸君はプロレタリア革命を、その全精神がプロレタリア革命を失敗させることに向けられてゐるジューオー氏と一所に行ふわけにはゆかないだらう。諸君はプロレタリア革命をヂエーオーと抗爭してのみ、同樣アルベート・トーマやピエル・ルノーデル（註六一）と抗爭してのみ、完成するであらう。諸君が黨を日和見主義から清め議會における諸君の代議士を共産主義者として登場せしめ、諸君が諸君の黨の陣列から黄色者流を追ひ出そうとするならば、卽ち諸君が共産主義者となりさへすれば、平勞働者、勞働組合員は諸君に從ひ、ヂューオーに背を向けるであらう。諸君が日和見主義を片づけることが早ければ早いほど、諸君はシンジカリズムの偏見をより早く克服するであらう。

赤色勞働組合は、國際的に結合し始めた。共産黨インターナショナル執行委員會の發意により、イタリー、ロシア、イギリスの左翼勞働組合は三角同盟（註六二）を形成し、この同盟から八月または九月に黄色勞働組合のアムステルダムインターナショナルに對抗すべき赤色勞働組合の國際大會が招集せられるであらう。フランスでもこの企てを支持せよ。諸君の勞働組合もまた赤色勞働組合のインターナショナルに加盟し、黄色者流と最後決定的に斷絶せよ。これがフランスにおけるほんとうの革命家の任務である。

第二篇　十月前夜における労働組合問題

第一章　ロシアの農業労働者組合創設の必要について

「プラウダ」の論文より、一九一七年八月二四日および二五日の九〇號、九一號、

現在ペテルスブルグに開會中の全露勞働組合會議は、一つの非常に重要な問題を取扱はなければならない。問題は、農業勞働者の全露的な組合をつくることである。

ロシアのあらゆる階級は組織をもつてゐる。あらゆる他の階級よりも搾取され、ひどい窮乏裡に生活し、最もひどく寸斷され抑え付けられた階級、ロシアの農業賃銀勞働者階級は、謂はゞ忘れられた狀態だ。若干の非ロシア的邊境地方、譬へばレツトランドには農業賃銀勞働者の組織がある。大ロシアおよびウクライナ諸縣の大多數においては、農業プロレタリアートの階級組織は一つもない。

ロシアプロレタリアートの前衛——工業勞働者の組合——の高貴にして且つ無條件的な義務は、彼等の兄弟、即ち農業勞働者を助けに行くことである。農業勞働者を組織する困難は大きい。それは明

瞭であり、全資本主義諸國の經驗によつて證明されたところである。

それだけ益々必要なのは、出來るだけ早く且つ出來るだけ精力的に、ロシアにおける政治的自由を利用して、全露農業勞働者組合を即刻に形成することである。勞働組合會議こそ正さにこのことを果し得るし、また果さなければならない。今日會議に集つたところのより經驗のある、より發達した、より階級意識に富むプロレタリアートの代表者こそ正さに、自分を獨立的に組織しつゝあるプロレタリアートの陣列に參加し、彼等の勞働組合の陣列に參加するやう、農業勞働者に向つて叫びかけ得るし、また叫びかけねばならない。正さに工場の賃銀勞働者こそイニシアチーブを取つて、全ロシアに分布してゐる勞働組合の細胞やグルーブや小團體を利用して、農業勞働者を獨自の生活に呼び起こし彼等の生活狀態の改善のための闘爭に積極的に參加し、彼等の階級利益を擁護するやうに呼び醒まさなければならない。

多くの人々にはこう見えるかも知れない——そしてむしろそれは現在支配的な意見ですらあらう——即ち、農民階級が全ロシアにわたつて自ら組織し、土地に對する私有權の撤廢とその「平等」利用權とを宣言してゐる現在、農業勞働者組合を創設することは時宜に適せない、と。

逆だ。正さにこういふ時期にこそそれは時宜に適し、猶豫すべからざるものなのだ。プロレタリアートの階級的利益の立場に立つものにとつて些かの疑ひもあり得ないのは、ロシア社會民主勞働黨ス

トックホルム大會（註六三）においてボルセヴイーキの提案によりメンセヴイーキから採擇され、その後ロシア社會民主勞働黨の綱領のうちに挿入さるゝに到つたテーゼの正しいことである。このテーゼは曰く。

「黨はあらゆる機會において、またあらゆる民主々義的改革に際して、農業プロレタリアートの獨自的階級組織に邁進し、農業勞働者に彼等の利益とブルジョア的農民のそれとの根本的對立を明かにし、商品生產の條件下では斷じて大衆の窮乏を除き得ないやうな農業制度にごまかされることのないやう彼等に警告し、最後にはあらゆる困窮とあらゆる搾取とを世界から取り除き得る唯一の手段として完全な社會主義的變革の必要を彼等に指示することを、その任務とする。」

このテーゼの正當性を認識し得ない唯だ一人の階級意識ある勞働者も、唯だ一人の勞働組合員も決してない。農業プロレタリアートの獨自的階級組織に闘する限りそれを實現することこそ勞働組合の任務である。

正さに革命時において、勤勞大衆一般の間に、分けても勞働者の間に、自己を主張し、進路を切り開き、勞働者自身が勞働の問題を獨自的に決定しようとする努力が活潑となつて來る——正さにかゝろ時期にこそ、勞働組合はその狹い同業組合的利益に閉ぢこもるべきではない。それはその弱い友達農業勞働者を忘れず、ロシア農業勞働者組合を創設し、以て彼等を全力を擧げて助力せねばならない。

第二章　勞働者の管理について

「ボルセヴイーキは政權を維持しうるか？」より、
一九一七年九月末、

プロレタリアート獨裁の主要困難は、全國的規模における生産物の生産と分配についての、最も正確にして良心的な計算と管理、即ち勞働者の管理の實現の點にある。

「ノヴアヤ・ジーズニ」（註六四）に書いてゐる人達が吾々を非難して、吾々は「勞働者の管理」といふスローガンを掲げることによつてサンヂカリズム（註六五）に墮したといふ場合、この非難は、本當に考へたのではなくスツルーベ（註六六）式の譜記した「マルクス主義」の書生ツぽ的な單純な適用の一模範例であつた。サンヂカリズムはプロレタリアートの獨裁を拒否するか、またはそれを政權一般と同樣に末席の方に追ひやるものなのだ。吾々はそれを最上席にもつて來る。吾々が單純に「ノヴアヤ・ジーズニ」派の連中の意味で、勞働者管理にあらずして國家管理、といふならば、そこから生れて來るものは一個のブルジョア改良主義的文句であり、根本的には一個の純カデット（註六七）的公式である。けだしカデットは「國家管理」への勞働者の參加に反對する筈は全然ない筈だからである。コルニロフ（註六七）流のカデットは、勞働者のかゝる參加はブルジョアジーにとり勞働

者を欺瞞する最良手段であり、多くのグチユコフ、ニキチン、プロコポウイチ、ツエレテリ（註六九）とその全徒黨特有の洗練された政治的買收の最良手段たることを、すつかりわきまえてゐるからである。

吾々が「勞働者管理」を唱え、而かもこのスローガンをいつもプロレタリアートの獨裁と相並ばせ、いつも直ぐその後に掲げるとすれば、吾々はこれによつて如何なる國家を問題にしてゐるかを明かにしてゐるのである。國家は一階級の支配の機關である。如何なる階級であるか？　ブルジョアジーが問題であれば、正さに、ロシアの勞働民衆が既に半年以上もその正體を知ることの出來たかのカデツト・コルニロフ的「ケレンスキー國家」である。プロレタリアートの國家、即ちプロレタリア獨裁が問題であれば、勞働者管理は、生産物の生産と分配とについての全國民的、全包括的、遍在的、最も正確にして良心的計算たり得るであらう。

これが主たる困難であり、これがプロレタリア革命即ち社會主義革命の主たる任務である。ソヴエートなくしてはこの任務は、少くともロシアにおいては、解決されないであらう。ソヴエートこそ、世界史的意義を有するこの任務を解決し得るプロレタリアートの組織的事業を物語るものである。

こゝで、吾々は國家機關の他の側面の問題に當面する。主として國家機關たる常備軍、警察、官吏群以外に、近代國家には銀行およびシンヂケートと特に密接に結びついてゐる一機關、いつて見れば

管理や簿記の尨大な仕事を掌る一機關がある。この機關は破壞さるべからず、また破壞さるを要しない。吾々はそれを資本家から收奪しなければならない。吾々は資本家を一切合切の彼等の影響力と共に、この機關から切り斷ち、打ち切り、伐り離さなければならない。吾々はそれをプロレタリアートのソヴェートに從屬せしめなければならない。吾々はそれを仕上げて行き、より包括的なものにつくり上げ、それを全民衆に役立つ一機關にして行かなければならない。大資本主義が既に實現した諸成果を基礎とするならば、(この成果を基礎としてのみ、一般にプロレタリアート革命はその目的を達成し得る如く、)吾々はこのことをなし得るのである。

資本主義は、銀行、シンヂケート、郵便、消費組合、使用人組合の如き計算機關を創出した。大銀行なくして社會主義は實現され得ないであらう。

大銀行は、吾々が社會主義を實現するために必要とし、吾々が資本主義から出來合ひのまゝで讓り受けたところの「國家機關」である。そしてその際吾々の任務は專ら、この卓越せる機關を資本主義的に歪曲するものを切り棄て、もつと尨大にし、もつと民主々義的に、もつと包括的なものにつくり上げることである。量は質に轉化する。各市町村、各工場にその支店を有する最大規模の單一の國立銀行——これは既に一〇中九まで社會主義的機關である。それは全國的規模における簿記を意味し、生産物の生産と分配の全國的管理を意味し、いはゞそれは社會主義社會の一種の骨格である。

この「國家機關」を(これは資本主義の下では完全に國家的とはなり得ないが、吾が國において は、社會主義の下では完全に國家的となるであらう)吾々は「受け取る」ことが出來、そして一擧にして、一布告を以て、「運轉せしめ」得るのである。けだし、簿記、統制、記錄、計算はこの場合、大部分自分もプロレタリアート乃至半プロレタリアート的狀態にある使用人によつてなされるからである。

プロレタリアート政府が一片の處分命を發することによつて、これ等の使用人は國家の使用人に轉化されることが出來、またされなければならない。それは丁度、ブリアン(註七〇)輩やその他のブルジョア大臣などの資本主義の番犬達が一筆走らせただけで、ストライキ最中の鐵道從業員を國家の官吏に變ずると同じである。吾々は益々多數のかゝる國家官吏を必要とし、またそれを獲得することが出來る。けだし資本主義は計算管理の機能を單純化し、それを比較的簡單な、讀み書き出來る人間であれば誰れでもこなし得る記帳の仕事にまでして了つたからである。

銀行、シンヂケート、商事企業等々の「國家化」はたいへんた易い、資本主義と金融資本とが既になして呉れた準備仕事のお影で技術的にも、またソヴェートによる統制と監規といふ條件の下では政治的にも、容易なのである。

その數の點では著しく少ない部分を占める資本家に加擔してゐる高級使用人に關しては、吾々は資

本家と同様に、即ち「嚴酷に」取扱はなければならない。それは資本家と同様「反抗」するであらう。この反抗を吾々は粉碎しなければならない。そして、いつまでたつても幼稚なペシエコーノフ（註七一）が生粋の「政治的乳兒」の如く既に一九一七年六月に、「資本家の反抗は粉碎された」と片言いつたとすれば、プロレタリアートはこの小兒じみた言葉、小兒じみた誇言、この若者らしいお饒舌を眞劍に行動に移し變へるであらう。

このことを吾々は完成し得るであらう、けだし問題は人口の極少部分、文字通り一握りの人間の抵抗を打ち平げることだからである。こういう人達は誰れも彼れも一人一人使用人組合、勞働組合、協同組合およびソヴェートによつて監視を受けてゐるので、このチツ・チツーツュ（註七一a）の誰れも彼れも、セダンにおけるフランス人の如く、自分が包圍されてゐるのを見るであらう。吾々はこのチツ・チツーツュのすべての名前を知つてゐる、即ち吾々は理事、重役、大株主等の名簿をひもどきさえすれば、充分なのである。全ロシアにわたつて彼等は數百人、高く見積つて數千人である。プロレタリアート國家はそのソヴェート機關、その使用人組合等を以て、一打乃至一〇〇人に及ぶ監視人を彼等一人々々の後に配置し、勞働者統制（資本家に對する）の力を借りて、彼等のあらゆる反抗を打破し得るのみならず、彼等の反抗そのものを不可能にすることが出來るであらう。

附　錄

（註）

（一）九〇年代におけるロシア産業の急速な發展と關連して、ストライキ運動の飛躍も認められるに到つた。一八九六—九七年にはペテルスブルグでストライキが勃發し、それは他の地方にも波及した。これ等のストライキはそれより以前のストライキよりも、組織性に優れ、意識的要素を多分にもつてゐたのが特色であつて、それ以前のストライキはむしろ自然發生的騷擾の性質を帶び、機械の打つ毀し、建物の破壞等を隨伴した。これと同じ勞働者の自然發生的行動は、資本主義の初期には西歐にもあつた。（イギリスの「機械打つ毀し屋」ドイツの織物工一揆等）勞働者運動が生長するに從ひ、ストライキは益々自然發生的性質を失ひ、益々組織的となつた。

（二）カール・カウツキー——ドイツ社會民主黨ならびに第二インターナショナルの最もすぐれたマルクス主義理論家。その科學的活動をエンゲルスの直接的指導の下に始めた。一八八七年以來ドイツ社會民主黨理論雜誌「ノイエ・ツアイト（新時代）」の編輯者。九〇年代ならびにその後も、カウツキーはベルンスタインの修正主義（註二七を見よ）の決定的批評家であつた。二〇世紀の最初の一〇年間は、彼は大體において正統マルクス主義を代表した。大戰の二、三年前から、彼は右翼に向きかけた。彼は、ドイツ社會民主黨における「マルクス主義中央派」の頭目となり黨の左翼派徹底的マルク

ス主義派と分離した。(左翼はローザ・ルクセンブルグ、カール・リーブクネヒト、フランツ・メーリングおよびクララ・ツエットキンを頭目として、遂にスパルタカスヴンドを創立し、これから後ドイツ共産黨は生れたのである。)大戰中カウツキーは、インターナショナル主義を祖國防衛と結びつけやうと努め、中央主義――姿を變えた改良主義の一種――の理論家となつた。ロシア革命後カウツキーは共産主義運動とソヴエート制度との卑劣な似而非マルクス主義批判を以て現はれ、ブルジョア民主主義と議會主義とを擁護し、プロレタリアート獨裁を攻擊し、終に一九二五年にはソヴエート國家への干渉とその强力的顚覆とを宣傳するに到つた。

(三)社會民主主義――勞働者運動における革命的マルクス主義的學說信奉者の舊稱。今日この名稱はそのもとの意味にかなはなくなつた。けだし今日社會民主主義者と稱してゐるものは、勞働者運動における日和見主義的要素であつて、彼等は階級鬪爭の立場に立たずして、階級協調の立場に立ち、從つて決してマルクス主義者にあらずして、似而非マルクス主義者であるからである。革命的マルクス主義者はこの日和見主義者から絕緣して、今日自ら共產主義者といつてゐる。――因みに、マルクス・エンゲルスも自ら共產主義者といつた。

(四)クレド(信仰個條)――クスコヴアの起草せる、當時のロシア「青年」社會民主主義者の政綱にして、經濟主義者(註一〇を見よ)の實踐の理論的基礎たるべきものであつた。

(五)トレード・ユニオニズム(勞働組合主義)――その任務を社會主義的目標の實現に見ずして、單に資本主義的社會秩序の埒內においての勞働者の利益の保證に見てゐるところの勞働組合運動であつて、彼等は資本主義を亡びることなきものと認識してゐる。トレード・ユニオニズムのイデオロギーは甚だ有害である、といふのはそれはプロレタリアート的イデイオロギーではなくして、ブルジョア改良主義のイデイオロギーであるから。トレード・ユニオニズムの根本的特徵は、狹隘な同業組合的精神、組織上の極度の分散、資本主義制度との協調である。舊トレード・ユニオニズムは鬪爭の手段によることを退け、これを協約、協定等によつて取換え得ると信じてゐた。最近までトレード・ユニオニズムは勞働者階級の獨立な政治鬪爭と政黨との必要を否定した。イギリスにトレード・ユニオニズムは生れ、一九世紀の後半期にその最高頂に達した。だが既に八〇年代にイギリスにおいてすら、勞働者運動における社會主義的要素の强大化と相連れて、新らしい多かれ少なかれ革命的なトレード・ユニオニズムが始まつた。舊トレード・ユニオニズムのイデオロギーは今日勞働組合において――たゞにイギリスのみでなく――まだ甚だ强い。それは大多數の改良主義的指導者と勞働組合役員との公認イデオロギーである。が他方組合員大衆は左の方に、革命的勞働組合運動の方へ發展してゐる。(イギリスにおける少數派運動、他の諸國における左翼反對派。)

(六)フエルジナンド・ラツサール(一八二四―一八六四年)――非マルクス主義派のドイツ社會主

義者。一八六三年にドイツにおける最初の獨立勞働者黨たる全ドイツ勞働者同盟を創立す。ゴータ大會（一八七五年）において、全ドイツ勞働者同盟は、ドイツのマルクス主義者（ベーベル、ウイルヘルム・リーブクネヒト）によつて創立された社會民主勞働黨（アイゼナッハ黨）と合同した。合同から生れたドイツ社會民主黨は、その日和見主義的陷落に到るまで全勞働者運動の模範として役立つた。

ラッサールの主な功績は、ドイツの勞働者階級をブルジョア民主主義者による組織的精神的後見から解放したことにある。

（七）シュルエ・デーリッツ――プロシヤ國民議會議員にして、勞働階級窮狀調査委員會議長。ドイツ手工業者と勞働者との間に、階級闘爭によらずして生産組合消費組合の助けを以て社會問題解決の思想を宣傳した。ラッサールは、勞働大衆をブルジョア民主主義的組織とイデイオロギーに從屬せしめるこの企てに、極力反抗した。

（八）進歩黨――自由主義ブルジョアジーの黨、一八六一年、プロシヤ憲法事件の激化に際し、舊自由黨所屬の東プロシヤ出の代議員にしてこの黨の政策に不滿であつた一連の人々と、古い四八年の民主主義者若干名によつて創立された。その綱領は純粋のブルジョア自由主義であつた。卽ち、ほんとうに「民主主義的要求、普通選擧、出版結社の自由等、ブルジョアジーと共にプロレタリアートの要求するものは沈默を以て看逃がされた。」（メーリング）ビスマークと當時のユンカー的反動とに對し

て微弱ではあつたがとまれ當初反對してゐたので、進歩黨にはブルジョアジーの自由主義的要素のみならず、勞働者の最も進歩的な層もまた集まつた。ラッサールの煽動の影響を受けて、たしかに勞働者は頗る急速に進歩黨から離なれ、獨自の黨をつくつた。普佛戰爭の後、進歩黨は益々ビスマークと接近するに到り、益々右の方に赴いた。一八八四年進歩黨はドイツ自由黨期成自由同盟と一つになつた。これは一八九三年に自由人民黨と自由同盟とに分裂した。一九一〇年に兩者は南ドイツ人民黨と共に、進歩人民黨に結成した。一九一八年一一月の變革以後、この黨はその名を變え、今日ドイツ民主黨と呼んでゐる。

（九）ドイツにおけるカソリック若しくはキリスト教勞働者組合と王制的勞働者組合――公けには「無黨」を標榜した勞働組合の一種であるが、實際は一定の政治的集團（中央黨その他）によつて指導される。キリスト教的その他の原則の假裝の下に、産業平和的政治が營まれてゐる。

ヒルシュ・デユンカー組合（一八八六年、自由主義者ヒルシュとその同志デユンカーによつて、ベーベル及びリーブクネヒトによる社會主義的宣傳から勞働者の注意を外らさんがために、創立された）もまた、階級的見地を排擊し、同じブルジョア的政治を追求してゐる。

社會民主主義組合は、社會民主黨の直接的協力と指導下に（譬へばドイツ、オーストリア、スウエーデン、デンマーク、オランダにおいて）つくられた勞働組合組織であつて、以前は純粋な階級的立

脚地をとり、資本主義の埒内における勞働者利益の擁護以外に、資本主義を倒すことをその任務としてゐた。

(一〇)經濟主義者――ロシア社會民主黨内における日和見的方向の信奉者にて、今世紀の當初特に膨脹し、黨組織の多くに侵入した。經濟主義者は中央集權的政黨の必要を否定し、主力を勞働者階級の自然生長的行動におき、勞働者階級の獨自的政治闘爭をも否定し、その任務を單に、日常闘爭のために、政治的中立を奉ずる勞働組合や勞働者協同組合その他を發展せしめるために、資本に對する經濟闘爭のうちにのみありとし、ツアーリズムに對する闘爭は主として智識階級と自由主義ブルジョアジーの仕事とした。

レーニンおよびプレハーノフは、經濟主義者に對する猛烈な闘爭を行つた。そして經濟主義はまもなく姿を消して、メンセヴイズムとなつた。

(一一)ラボーチヤヤ・ムイスリ(勞働者思想)――一八九七年ペテルスブルグに創刊された社會民主主義紙、最も決定的に經濟主義の立場を主張す。(註一〇を見よ)

(一二)勿論當時の社會民主黨のことで、今日のそれではない。(註三を見よ)

(一三)ラボーチヤヤ・デエーロ(勞働者問題)――社會民主主義雜誌、一八九九―一九〇二年の間クリツユースキーおよびマルツイノフ(註一五を見よ)編輯の下に發刊され、ロシア社會民主黨内に

おける日和見主義的潮流を反映した。この雜誌は勿論、ラボーチヤヤ・ムイスリ(註一一を見よ)の立場を超えやうと努力したことは事實であるが、いつもまた日和見主義に墮落した。

(一四)イスクラ(火花)――ロシア社會民主勞働黨中央機關紙、一九〇一年創刊、外國にて發行される。一九〇三年までは――レーニン、プレハーノフ、マルトフ、アクセルロイド、ザスリツツの指導の下に――當時のロシア社會民主黨内におけるあらゆる革命的要素を一つの統一的中央集權黨に結成する努力の中軸たる役割をしてゐて、革命的、純粹マルクス主義的立場を代表した。そして最も決定的に經濟主義その他の日和見主義的偏向と戰つた。ロシア社會民主勞働黨第一回大會(一九〇三年)後、同紙はメンセヴイーキの手に陷り、その革命的性質を失つた。

(一五)マルツイノフ――ラボーチヤヤ・デエーロ(註三を見よ)編輯者の一人、九〇年代においては經濟主義の卓越せる代表者、ロシア社會民主黨分裂(一九〇三年)に際しては、メンセヴイーキに加擔す。戰時中インターナシヨナリストとなり、一九二〇年以來ロシア共產黨員である。

(一六)「ロシア社會民主主義者同盟」は、一九〇五年に創立され、間もなく經濟主義に傾き始めた。一九〇五年スイスにおいて開かれた同盟大會において、革命的小數派は終に同盟から脫退し、「ロシア社會民主革命團」をつくり、プレハーノフ(註三〇を見よ)はその頭目であつた。ラボーチヤヤ・デーエロ(註一三を見よ)をも含んでゐる多數派は、舊名を保持した。外國ならびにロシアにおける同

盟の重要性は益々少なくなつて行く。ロシア社會民主勞働黨第二回大會において同盟は解體を宣言された。

(一七)ラボーチヤヤ・デエーロ誌に載せられた一論文の表題。

(一八)ゼムスキーエ・ナツアールニーク——農村における官憲の代表者、ツアー政府の勞働者農民に向けたる彈壓政策の象徴と考へられてゐた。

(一九)異教徒——キリスト教の宗派の所屬者、正統國教會に背いて居り、絶對主義に對し反對的態度をとつて居たので、ツアー政府から迫害された。

(二〇)學生——革命的活動のために罪せられるか、または嫌疑を蒙つたものは、兵士の軍服を着せられ、最も邊境な地方に送られるのを常とした。

(二一)ブンドまたはリトアニア、ポーランド、ならびにロシアにおける全ユダヤ人勞働者同盟——一八九七年に創立、一八九八年に自治團體としてロシア社會民主勞働黨に加盟す。社會民主勞働黨第二回大會(一九〇三年)が嚴重な中央集權主義の原則を認むるや、ブンドは黨から脱退した。再合同は、ロシア社會民主勞働黨ストツクホルム合同大會(一九〇六年)の後初めて行はれた。その創立以來、ブンドはメンセヴイーキに接近してゐた。一〇月革命後初めてそれは、メンセヴイズムの原則を克服し初めた。分裂が生じ、成員の大部分はボルセヴイズムに移つた。

(二二)ラボーチヤヤ・ムイスリー——(註一一を見よ)

(二三)自己解放團——思想上ラボーチヤヤ・デエーロに近い。

(二四)ラボーチヤヤ・デエーロ——(註一三を見よ)

(二五)ウエツブ夫妻——イギリス勞働組合主義史の基本的著作の有名な著者。一九二三年ウエツブはマクドナルドの「勞働政府」において商務大臣の地位についた。

(二六)ラボーチヤヤ・デエーロ誌の信奉者(註一三を見よ)

(二七)ベルンスタイン主義者——修正主義理論家エドワード・ベルンスタインの信奉者、ベルンスタインは八〇年代エンゲルスの指導下に革命的マルクス主義者としてその活動を始め、一九世紀の終りに革命的マルクス主義から離れた。その有名な著書「社會主義の諸前提」(一八九九年)においてベルンスタインはマルクス主義學説の修正をはじめた。「修正主義者」の名前もこれに由來する。この說によると、歴史的過程はブルジョアジーとプロレタリアート間の階級鬪爭の激化とならずして、その弱勢化となり、勞働者階級の中心任務は社會主義のための鬪爭ではなくして、改良のための鬪爭であり、社會主義を漸次議會主義的鬪爭によつて達成することが可能である、と。ベルンスタインは第二インクーナショナルに所屬するあらゆる黨派——ロシアの社會民主黨また——における日和見主義の理論的指導者となつた。

(二八)段階論――經濟主義者の理論、これによるとプロレタリアートの鬪爭は種々な相繼起する段階を通過しなければならない。先づ最初に純粹な經濟鬪爭、プロレタリアートが經濟鬪爭の地盤の上において充分な經驗を積むや、政治的煽動に踏み出してもよい、云々。

(二九)ツアールの支配下においては、ロシア社會民主黨は民主主義的諸要求のためにも戰つた。この要求の實現は當時の狀勢にあつては、社會主義のための鬪爭を樂にすることを意味してゐた。

(三〇)ゲオルグ・プレハーノフ――ロシアマルクス主義の建設者、一八八三年に最初のロシア社會民主主義團體「勞働解放團」を創立す。一九〇一年にプレハーノフは、レーニンによつて創刊された社會民主主義紙「イスクラ」(註一四を見よ)の編輯部に入つた。この新聞は當時優勢であつた日和見主義的傾向と鬪ひ、中央集權的革命黨を創設する事をその任務としてゐた。ロシア社會民主勞働黨第二回大會における分裂後、プレハーノフは若干躊躇した後メンセヴイーキに加擔した。戰爭中、彼は極端な愛國社會主義的立場をとつた。一〇月革命當時、プレハーノフは特に精力的にレーニン、ボルセヴイーキ、およびボルセヴイーキ政權に抗爭した。プレハーノフは、第二インターナショナルの最も典型的な且つ最も勢力のある指導者の一人であつた。その哲學的著作においては、彼は正統マルクス主義者であつた。レーニンはプレハーノフの哲學的著作を「共產主義の必修教科書」として推せんしてゐる。プレハーノフは一九一八年五月に死んだ。

(三一)清算主義者――ロシア社會民主黨内におけるメンセヴイーキ的方向の加擔者にして、一九〇五年革命の敗北後、勞働者運動が粉粹され、非合法的團體への參加が政府によつて最も嚴重に制せられたとき、古い非合法團體を清算しやうとし、社會民主主義的活動を、合法的限界に限るべきだと、煽動した。ボルセヴイーキは、實際においてプロレタリアートの獨自的階級鬪爭の放棄とブルジョアジーの思想的制覇へのその屈服を意味するところの、清算主義者に對する情熱的鬪爭を行つた。

(三二)マルクス主義者――清算主義者と區別して、ボルセヴイーキは自らをツアーの官憲を顧慮して合法的勞働者新聞において、こう呼んだ。

(三三)一九一二年四月レナ河(シベリア)金鑛において、其處の勞働者に對しおそろしい虐殺が行はれた。レナ事件は、類例なき鋭さを以て、經濟的ストライキの政治的ストライキへの轉化を示した。事實の理論は最初純粹に經濟的性質の低度な要求を提出したにすぎなかつた勞働者を驅つて、ツアール的專制に對する直接的鬪爭に赴かしめた。ストライキの流血的鎭壓は、全ロシアに一聯のはげしい政治的ストライキを勃發せしめた。

(三四)ドレアンセ――フランス大革命において、憲法制定代議員に宛てて選擧人が彼等の希望や苦惱を訴えたところの文書。

(三五)ここで問題の決議は、一九〇七年一一月第二インターナショナルのスツツトガルト大會にお

いて決議されたものであつた。レーニンの議論をよりよく理解するために、吾々は次に原文のまゝを掲げる。

一、精神的、政治的、ならびに經濟的奴隷の桎梏からプロレタリアートを完全に解放するためには勞働者階級の政治闘爭と經濟闘爭とが同程度に必要である。社會主義的黨組織の任務が主としてプロレタリアートの政治闘爭の領域にある如く、勞働組合的組織の任務は就中勞働者階級の經濟闘爭の領域にある。黨と組合とは從つて、プロレタリアートの解放闘爭において同等價値の任務を遂行しなければならない。

兩組織のそれぞれは、その性質によつて定つた特有の領域を有し、この領域においては、その行動を完全に獨自的に決定しなければならない。だがこれと相並んで、黨組織と勞働組合組織との共同一致的行動によつてのみその成功がかち得られるところの、プロレタリアート階級闘爭の領域が益々廣まりつゝあるのが見られる。

プロレタリアートの闘爭はそれ故、勞働組合と黨組織との關係が密接なればなるほど、益々有效に徹底的に行はれる、そしてその際勞働組合の統一に留意されなければならない。

大會は、あらゆる國々において黨と勞働組合との密接なる關係がつくられ、繼續的に維持さるゝやう、勞働者階級は努めなければならないことを、宣言する。

黨と組合とは、その行動において道德的に奬勵し合ひ支持し合ひ、その闘爭においてはプロレタリアートの階級闘爭を促進する單なる手段として役立つべきである。

勞働組合は勞働者の解放闘爭における義務を、その行動において社會主義的精神によつて指導されてのみ、遂行することが出來るであらう。勞働者の社會的地位の向上と改善とに向つての勞働組合の努力を促進するの義務が、黨に課せられてゐる。

大會は、資本主義的生産方法の進歩、生産力集中の發展企業家結合の發展、個々の經營の全ブルジョア社會への依存性の增大は、勞働組合が若し專ら同業組合的利己主義と資本と勞働との利益階調論との基礎の上において職業的協同團體の利益をはかるならば、勞働組合的活動を無力にしなければならないものであることを、宣言する。

勞働組合の組織が統一的であればあるほど、その勞働組合的闘爭に缺くべからざる基金が豐富であればあるほど、經濟生活の諸條件の關連についてのその組合員の洞察がより深ければ深いほど、社會主義的理想から最も力强く生れ出るところの彼等の犧牲心と情熱がより高ければ高いほど、勞働組合は搾取と抑壓とに對する闘爭を益々成功的に遂行することが出來る、と大會は考ふる。

二、一八九九年のブラッセル會議において提出され、一九〇〇年パリ大會において採擇された規定に據り、大會はあらゆる勞働組合に國際大會に代表を送り、ブラッセルにおける國際社會主義事務局

と密接な連絡をとることを勸める。大會は後者に、ベルリンの國際勞働組合書記局と組織と煽動とについての相互的報告をし合ふために、連絡するやう委任する。

三、大會は國際社會主義事務局に委托するに、各國における勞働組合と社會主義黨との關係についての研究を容易にすることが出來、次の大會においてこの點につき報告をなし得るためにあらゆる資料を集めることを以てす。

(三六)社會革命黨——小ブルジョア的な、主として農民中の一定層を支柱とした黨であつて、專制主義の顚覆するまでは非常に急進的であつた(テロの使用など)。戰爭となるや愛國社會主義となる。十月革命後、社會革命黨は積極的に反動革命の側において鬪ひ、革命の最も優秀な指導者に對する鬪爭にテロリスト的方法を用ひた(レーニンの暗殺軍)。現在社會革命黨は、政治的には絕對的に無勢力である。

(三七)プレハーノフ——註三〇を見よ。

(三八)ルナチヤルスキー——ロシア社會民主勞働黨の古い黨員。有名な著述家、劇作家、批評家、哲學者、一〇月革命後敎育人民委員。

(三九)修正主義者——註二七を見よ。

(四〇)アウグスト・ベーベル——ドイツ社會民主黨の創立者の一人にて有名な指導者、修正主義者

に對し正統マルクス主義を擁護す、尤も常に決定的且つ首尾一貫せるといふわけには行かなかつたけれども。一九一三年に死す。

(四一)ウオルマール——有名なドイツ社會民主黨員、ベルンスタインの修正主義(註一七を見よ)の信奉者、あらゆる基本的問題(軍國主義、農業問題、殖民政策)において明白な改良主義的立場をとる。

(四二)サヴレメニイ・ミール——ロシアの合法マルクス主義雜誌にて、プレハーノフまた同人たり。戰爭中、この雜誌は「祖國擁護」を立場とす。

(四三)バゼン元帥——ドイツ軍にメッツに包圍され一八七〇年に降服せるフランスライン軍司令官。レーニンは、バゼンは終始敵から退却しやうとかゝつてゐたので有名だ、と云つてゐる。

(四四)ロイド・ヂョージ——有名なイギリス自由黨指導者。嘗つてのイギリス首相。一九〇七年彼は、リヒヤード・ベルその他勞働組合指導者と妥協し七年間の效力をもつ賃銀協約に贊成せしめて、鐵道從業員ストライキを敗北せしめた。

(四五)フエビアン協會員——フエビアン協會は、一八八三年イギリスに創立され、社會主義思想の宣傳を目的とす。資本主義社會は漸次的改良の道を通じて變更出來るといふ信念の下に、フエビアン協會は、その逡巡政策によつてローマの勝利を確保したローマの將軍フアビウス・コンクテーターの

名前をとつたのである。フエビアン協會員は、以前から社會發展の推進力としての階級闘爭を排擊し、カール・マルクスの學說に反對した。最初、それは小ブルジョア急進派を支持した。一九一八年以來、專ら勞働黨を支持してゐる。成員の少ないフエビアン協會（九〇〇——一〇〇〇人、主として知識階級）は以前から一個の宣傳倶樂部で、少しも政黨ではなかつた。

（四六）レギエン——全ドイツ勞働組合同盟の會長、鮮明な改良主義者。一九二〇年に死す。

（四七）ユーデニッツ將軍——西北白衞軍の指揮官、レーニングラードへの進軍の指導者たり。

（四八）デニキン將軍——南露における白衞軍の指揮官。

（四九）ゴンバース——世界における最も反動的な勞働組合たるアメリカ勞働總同盟の會長、彼は階級協調に留保なく味方し、あらゆる社會主義運動に反對し、獨立な勞働者黨の建設に反對し、アムステルダム・インターナショナルすら革命的にすぎると考へてゐた。一九二五年に死す。

（五〇）ジューオー——戰前までアナルコ・シンジカリスト、戰時中熱心な愛國主義者となる。アムステルダム・インターナショナル指導者の一人。

（五一）ヘンダースン——イギリス勞働黨の右翼指導者の一人、戰時中ロイド・ヂョージ內閣に列す。

（五二）メルハイム——フランス勞働總同盟（C・G・T）のアナルコ・シンジカリズム系の指導者の一人、大戰の反對者で、チンメルワルド會議にすら參加した。戰後彼は充分首尾一貫せる階級闘爭者

でないことを曝露し、コンミンテルンに抗爭し始め、改良主義に落つ。

（五三）メンセヴイーキ——ロシア社會民主黨內の日和見主義派。ロシア社會民主勞働黨第二大會において、黨はレーニンの指導せる革命的多數派と日和見主義的小數派とに分裂した。これに應じて、レーニン派は多數派（ロシア語でボルセヴイーキ）と日和見主義派は小數派（ロシア語でメンセヴイーキ）と名づけられた。

（五四）ダニエル・デュ・ロン——I・W・W創立者の一人（註五五を見よ）

（五五）I・W・W——アメリカ勞働者のシンシカリズム團體（註六五を見よ）

（五六）ズバトフ——モスクワ憲兵分隊長、一九〇三——一九〇四年に勞働者協會を組織す、この協會は今日のフアシスト團體を想はしめるものがあり、勞働者の注意を專制主義に對する闘爭から外らすを目的とした。

（五七）トリビューン——オランダ左翼社會民主主義者の機關紙、戰時中反軍國主義的宣傳を行ふ。トリビユン派はチンメルワルド派に加盟し、ロシア十月革命後はソヴエート政府を擁護す。一九一九年コンミンテルンに加盟し、その機關紙はオランダ共產黨機關紙となつた。

（五八）アムステルダム勞働組合インターナショナル——勞働組合の國際的同盟にて、アムステルダムにその事務局あり、第二インターナショナルの指導下に立つ。「黃色」といふ名前でレーニンは、ア

ムステルダム・インターナショナルの行ふ政策と、以前獨立な勞働組合自身が「黃色」と呼んでゐた階級闘爭を否定し産業平和政策を信奉する勞働組合との、同一性を示してゐる。

(五九)フロッサール――フランス社會黨員、一九二〇年の分裂後、コンミンテルンに加盟したが、間もなく共産主義から遠ざかり、一九二三年フランス共産黨より除名さる。

(六〇)C・G・T(勞働總同盟)フランスの勞働組合團體、一九〇二年創立。一九一一年六〇萬人を數ふ、一九二〇年にはほぼ二〇〇萬人。戰時中その指導者は愛國主義的立場をとり、ブルジョアジーとの協調を宣傳し始めた。一九二一年一一月革命的分子は改良的分子によりC・G・Tから追ひ出され獨立團體を組織した、統一勞働同盟(C・G・T・U)がこれで、赤色勞働組合インターナショナルに加盟す。

(六一)アルバート・トーマ――フランス社會黨最右翼指導者の一人。戰時中軍需大臣、現在國際聯盟勞働事務局事務長――ピール・ルナウデル――愛國社會主義者、フランス社會黨最右翼指導者の一人。

(六二)赤色勞働組合インターナショナルの土臺石となつたのは、一九二一年六月モスクワにおいて、イギリス勞働組合並にイタリー勞働組合の使節員と全露勞働組合中央評議會の代表者との協定であつた。

(六三)ロシア社會民主勞働黨ストックホルム大會は、合同大會ともいはれ、一九〇六年四月に開催さる。この大會の任務は、二つの對抗的フラクションたるボルセヴイーキとメンセヴイーキと、またその當時また相互に分離して活動してゐたすべての民族的社會民主主義團體(ポーランド・リトアニア等)を一個の黨に結合することであつた。この黨大會において、メンセヴイーキは多數派たり、一般にその日和見主義的な、妥協政策で貫かれた決議が採用された。

(六四)ノヴアヤ・ジズニ(新生活)――二月革命と一〇月革命との間にペトログラードに發刊さる。この新聞は中央派メンセヴイーキ的な線を代表し、權力掌握ならびに社會主義的變革の問題においてボルセヴイーキに反對した。

(六五)サンジカリズム――主としてラテン諸國において見られる勞働運動の潮流。サンヂカリズムは勞働者階級の政治闘爭を否定し、プロレタリアートの政黨の必要、議會參加、社會主義實現のための政權の占領に反對す。サンヂカリズムの認める唯一の而かも充分な階級組織形態は、勞働組合であり、ゼネラルストライキを以て資本主義打倒社會主義樹立の手段と見る。全勞働者階級と等しく、世界戰爭中サンヂカリズムも二派に分裂した。日和見主義的妥協的分派(ジューオー指導下のフランスのサンヂカリストは裏切社會主義者と一寸も區別するところない)と革命的分派とがこれで、後者はさらに二つのグループに分る。一つは共産主義と革命的勞働組合運動(譬へばスペインおよびフラン

スにおける）とに近づき、他は似而非革命的グループで、赤色勞働組合、コミンテルン、ソヴエート獨裁に抗し、獨自の謂ゆるベルリン・インターナショナルを創立した。後者は小數のドイツ、南アメリカ、その他のサンヂカリストを抱擁す。

（六六）ピーター・スツルーベ――九〇年代社會民主主義者、二〇世紀當初に自由主義に移る。一九〇五年の革命敗北後、スツルーベは自由主義最右翼の指導者となり、終に極端な反動的國民主義におちつく。革命當時彼はデニキン將軍の白衛軍政府に參加し、後その後繼者ウランゲルの大臣であった

（六七）立憲民主黨――略してカデツト、また國民自由黨とも呼ぶ、一九〇五年一〇月成立、自由主義ブルジョアジーの黨たり。大衆の壓力の下に、二月革命後カデツトは共和國贊成を表明す。それは政府黨となり、その周圍にあらゆる反動分子を糾合す。コルニロフ將軍のペトログラード進軍を支持し、また一〇月革命に對するロシアならびに國際ブルジョアジーの全鬪爭を支持す。

（六八）コルニロフ將軍――一九一七年八月、軍人および有産階級の反革命的陰謀の頭目たり。

（六九）ゴオスデュー――メンセヴイーキ、清算主義者、祖國防衛派の最右翼。ケレンスキー聯合內閣の一大臣の次官。ニキチン――メンセヴイーキ祖國防衛派、一九一七年夏の聯合內閣の大臣。ボロコボウイツチ――著述家、勞働者運動の問題についての著あり、明白な日和見主義者。ツエレテリー

――メンセヴイーキ指導者、一九一七年革命においてのブルジョアジーとの妥協政策の煽動者。

（七〇）ブリアン――もと社會主義者、八〇年代に熱心なゼネラルストライキの主張者たり。今世紀に入るや、裏切者となる。一九〇九年、大臣としての資格において全鐵道從業員に動員令を下して、フランスの鐵道從業員ストライキを敗北せしめた。戰後外務大臣、ソエヴエート同盟の最もはげしい反對者。

（七一）ペシエコノフ――カデツト（註六七を見よ）と社會革命黨（註三六を見よ）との間を動搖し、大衆には少しの勢力ももつてゐないところの人民社會黨の指導者。ケレンスキー聯合內閣の一大臣。智識階級、小ブルジョアの典型的代表者。

（七一a）チツ・チツーツユ――ロシア文學における一人物。ロシアでは資本家を名指すために用ひられる。

昭和二十一年四月十日印刷
昭和二十一年四月十五日發行
昭和二十一年七月十日再版

勞働組合論
定價五圓（稅共）

譯者　關東地方勞働組合協議會
東京都麴町區丸ノ內三ノ一二（仲三號館一號）

發行者　山內忠吉
東京都下谷區上野山下町二

印刷所　鐵道弘濟會東京印刷工場

配給元　日本出版配給株式會社

發行所　永美書房
東京都麴町區丸ノ內三ノ一二（仲三號館一號）
會員番號　A二〇五〇〇一

33.3.11